

533
178



始



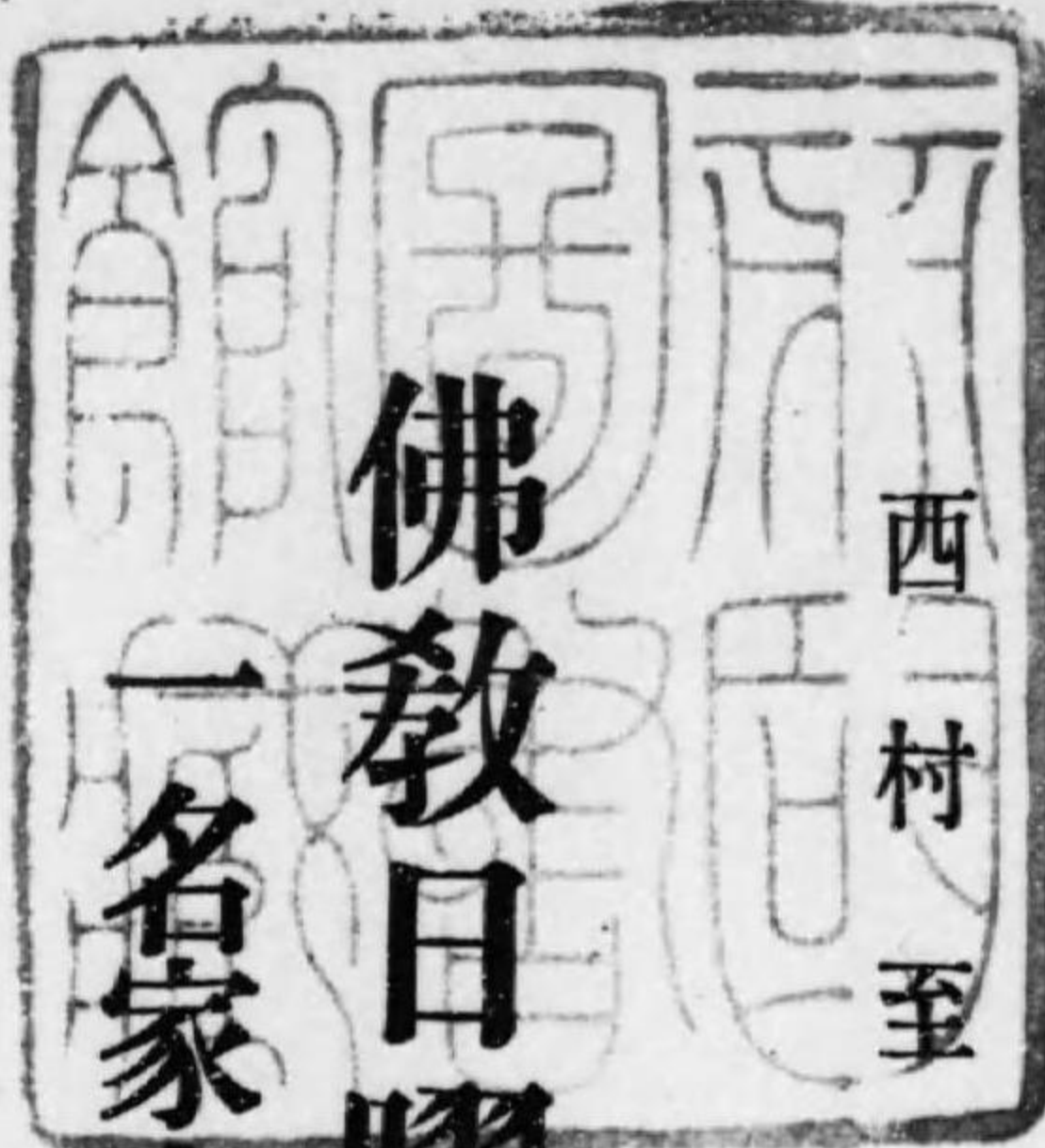
533

178

新刊石印首下監修
併教日曜學校教誨全書

編共 仙臺川沙
遊遊村西

一各名家戶及現宗教訓育資



汐川泰仙
西村至遊
共編

佛教日曜學校教話全書

一各家庭に於ける兒童宗教訓育の資料

大正
15. 6. 22
内交

敬
信
人

敬
信

敬
信

敬
信
人

敬養之基在孝信



興國之本存乎人

神戶修養會總裁

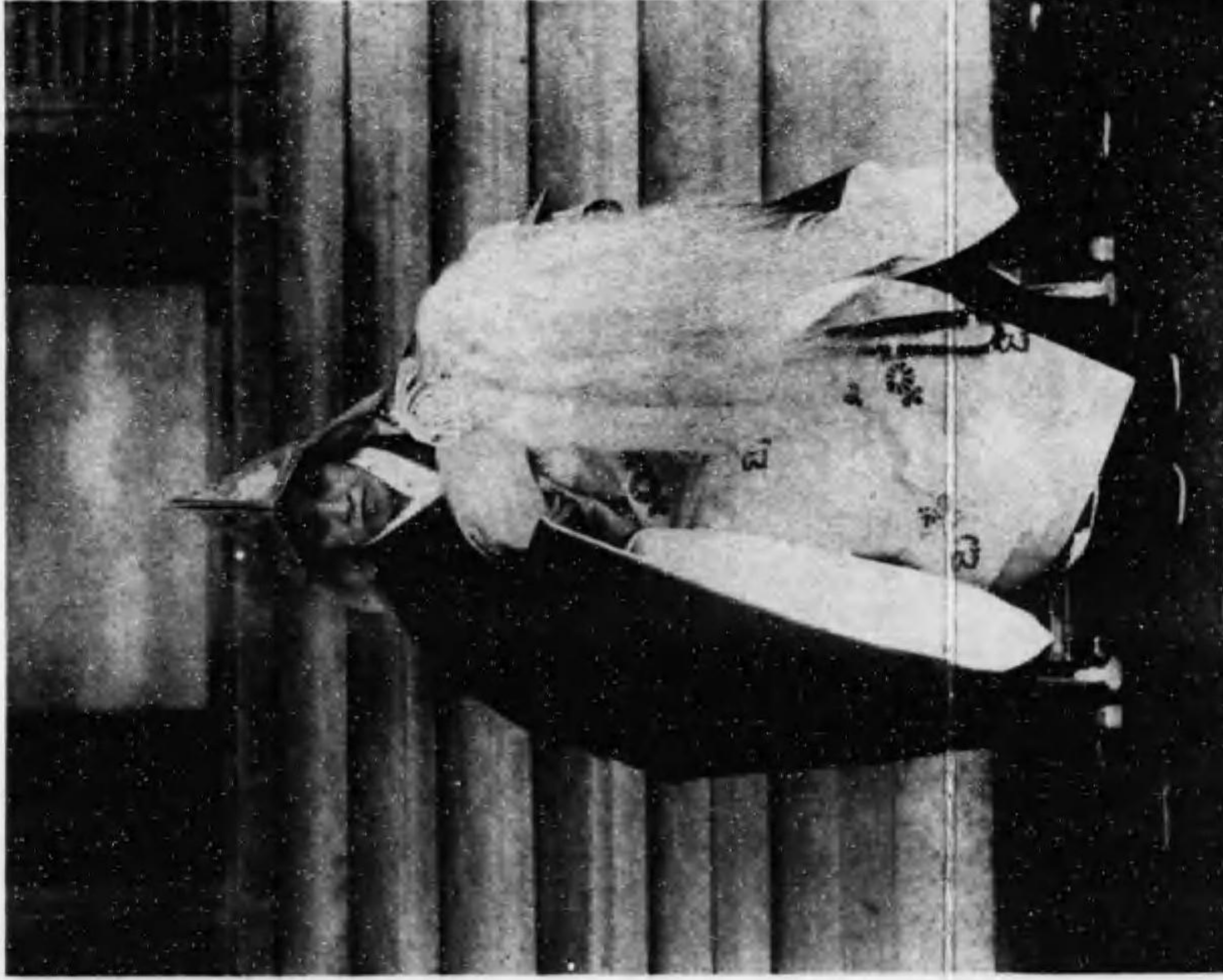
修養會會長

總持寺貫首新井心澤

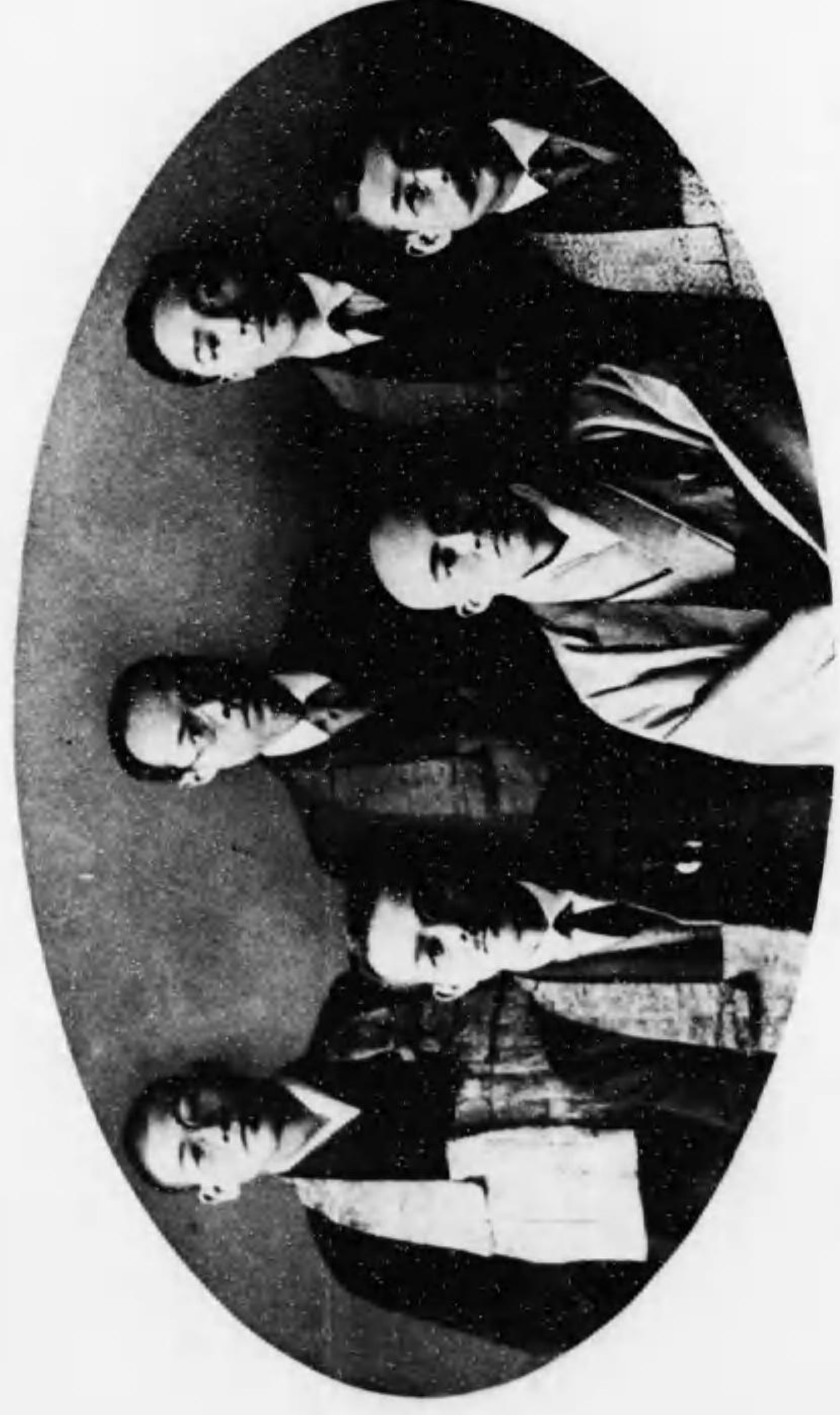




（初）日曜
音楽隊
ひこの松虫



上圖は總裁新井石禪實宮殿下本山御普山式に際し本會より普山記念として御贈呈せし御法服一式を召され紫雲臺の前にての御尊影



師仙泰川沙 主會本 士居悟了關 任主部輯編 列前りよ右てつ向
士居遊至村西 師教任專校日會本 列後 生先笑含澤石 師講任專話童伽御會本
師眠丹田岸 事主校日會本 生先觀等鹽大 任主部樂音



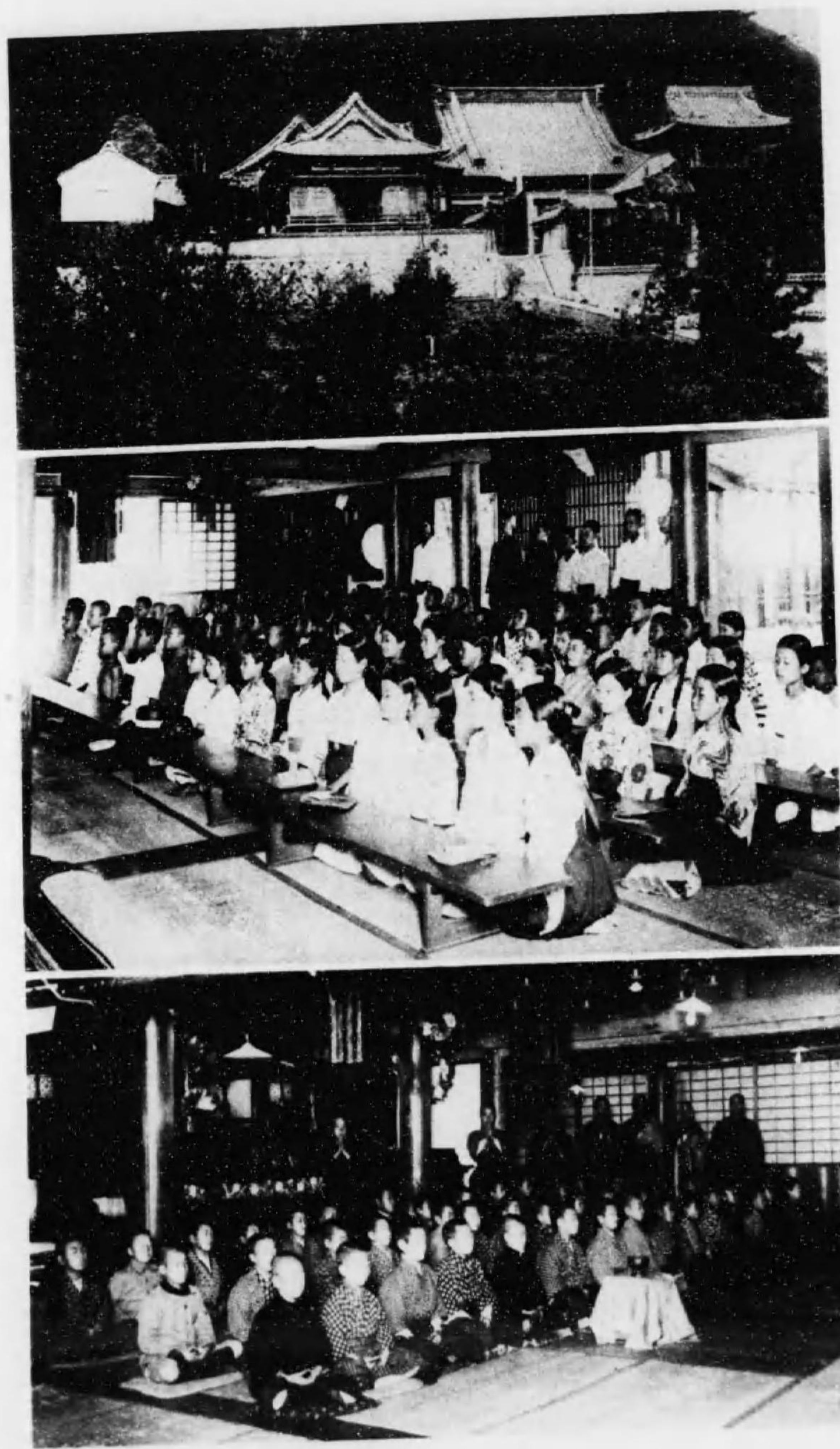
上 日曜學校 夏季(朝)日曜
 中 日曜學校 音樂隊
 下 修養ノドモ會 びつこの松虫

上圖は總裁新井石禪貫首親下本山御普山式に際し本會より普
 念として御贈呈せし御法服一式を召され紫雲臺の前にての御





(大正十二年五月卅日)
**御痛はしの御涙
 少年の遙拜般若心經讀誦
 の聲を聞召されて**
 上甲板に御佇立の兩殿下
 (上略)人眼を惹いたのは秋葉山歡喜
 寺住職沙川泰仙師が修養コドモ會の
 代表者として二十名を引率し來り靈
 前に沙川師と其の代表一名とが焼香
 し外一同は突堤に起立合掌して般若
 心經を讀誦すると夫れを聞召された
 る兩殿下には最高甲板に登らせ給ひ
 突堤を洗ふ波に和す少年の讀誦の聲
 に今更乍ら御涙を泛べさせられたる
 御有様の御痛はしく並居る諸官文武
 も面を伏せて袖を絞り合ふた事であ
 った(下略)
 (神戸又新日報當時所載抜萃)
 (御寫眞參照) 上圖は(一)徳川侯夫人
 (二)喪主水久王殿下、(三)竹田宮妃昌
 子内親王殿下
 下圖は右側沙川泰仙師の靈前焼香、
 左コドモ會代表山田芳男



上 日曜學校會場全景
 中 日曜學校
 下 日曜學校

(表書の寫眞と参照)
故北白川宮殿下の靈柩香取丸甲板下の突堤に於いて二十名の修養コドモ會の心經讀誦して合掌低頭
禮拜して居る有様(神戸又新日報撮)

かなしきこの日

佛の組 尋常六年生 修養コドモ會員
山田芳男

花も葉もしほみ、大空の色も失ひあらゆるものは皆涙にそゝつて居るこの日は何日ぞ、今日こそ故
北白川宮殿下の御靈柩奉戴の御船が着いた日。我等生徒二十名は汐川先生に引率せられ御靈柩の
禮拜に詣る。汐川先生と私とが代表して、かしくも御靈前に焼香するの光榮に浴しました。御靈



前にて一心に合掌すると靜かに二十餘名の生徒の讀經が初まる。その悲しき經文の聲を各宮殿下御
乗船の一同の方々は御聞き召し涙にむせび、たゞ沈黙をつゞけて居られた。浪間に響く經文の
聲に空飛ぶ鷗さへ悲しげに御薨去の事ども語り合ひ去つて行く。殿下には安らかに眠り給ひ、我が
等の至誠の經の聲をお受け下されたに違ひないと拜察すれば嬉くてたまりませんでしたこれも我等
佛様の道を信ずる御蔭であると思つて居ります。(大正十二年五月卅日)

序

國家の興廢も文化の隆替も繋りて國民精神の教化如何に在ることは固より論を待たぬ、彼の管子が一年の計は穀を樹ゑるに在り十年の計は木を樹ゑるに在り百年の計は人を樹ゑるに在りといへる如く、國家永遠の計は第二の國民を教養して國力の基礎を培養するに在らねばならぬ、是れ獨り我が國の光輝を發揚するのみならず、進んで東洋の文化を伸暢し世界人類の福利を招來する所以である、神戸歡喜寺主汐川泰仙師は曩に神戸修養會を創立して専ら國民精神の教化に精進し、尋

二
て修養コドモ會を組織し、更に兒童教養の徹底を期する爲め日曜學校を開設し、講師教員諸賢不斷の努力に依りて益々好成績を擧ぐるを得たるは、國家の爲め欣幸に堪へざる所である、本年は恰も修養會創立十周年に相當するを以て、之を記念する爲め、既往六年に亘る兒童教養の實修實驗を基本として佛教日曜學校教話全書を發行し、廣く之を天下に流布し、兒童教化の資料に貢獻するに至つたのである、抑々我が國の佛教は古聖先徳の愛國的熱情に依りて特異なる發達を遂げ、我が佛陀大聖の高邁なる知見と圓滿なる徳相と博大なる慈悲とが渾然調和して、我が國體の精華と國民道德とに融合して、

中正穩健なる醇風美俗を創造し、其の徳化の寛宏雄大なる、國際道德の向上に資し、世界人類に光被して等く平和と幸福との天地に逍遙せしむべき包容力を有するのである、従つて兒童を教養するに當りても、専ら宗教的情操を涵養して徳性の素質を薰育し、正義に勇みて邪欲を制し雅量を蓄へて元氣を振ひ純情を養うて徳行を樂しみ規律を重んじて怠慢を遠さけ、感興と趣味との間に身心の健康と智徳の並進とを期せんとするの外は無い、此書の編述も亦之に外ならざるを以て、獨り日曜學校の教材の一助たるのみならず、家庭訓育の資料としても補益する所少なからざるべきを信ず、大方の君子幸

に此書を座右に備ひ以て兒童教養上の一件侶と爲し玉はゞ實
に是れ本會の幸榮である

神戸修養會總裁

總持貫首 新井石禪

序 文

輓近一年と其の數を増加しつゝある佛教日曜學校に於ける訓
育教養の資料たる良教材のなき事は斯道の缺陷として遺憾と
する處であります、據つて本會總裁新井石禪禪師猥下の御裁
可と其の御監修の下に、本校主任教師西村至遊先生に日校教
話全書編輯の企てを囑託し本校創立以來の經營の教材と其の
實際を基本として西村先生の特に御研究の結果、茲に信仰的
に情操を向上せしむるに適當なる教話と、宗教心の萌芽を培
養するに適切なる御伽話を配當したる本書を發行し以て日校

二
經營者の指針とし参考に供するは無上の歡喜とする次第であります、又他面家庭に於ける兒童宗教々育の資料ともならしむべく敢へて佛教信徒の家庭にも必備あらん事を希望す

汐 川 泰 仙

はしがき

一、本書は恩師汐川泰仙師の御要求に依り、神戸修養會創立十周年記念として編纂し本會總裁新井石禪師猥下の御監修を辱りして發行したものであります。

一、本書は次の様に御利用下さい。

イ、日曜學校に於ては

之を謄寫版刷りとして毎日曜各兒童に一枚宛與へます。教師はこの教話を骨子として適當に布演します。兒童は貰つた謄寫版刷りの教話を家庭に持つて歸つて其父兄に示します。父兄は之に依つて自己の信仰を進めて行くことが出来ませう。毎週の謄寫版刷りは一年の終りには立派な一冊の教話

集になります。かくして出来上つた教話集は、児童の成長後いかに懐かしい、麗はしい思ひ出になることとせう。児童出席の奨励ともなり家庭教化ともなる此の方法を日曜學校經營業には御すゝめ致します。

ロ、葬儀、法會等の際には

多数の児童が集ります。此種の機會あれば假令五分間でも本教話を活用して頂きたい。それは、未だ日曜學校のない地方に於てはやがて日校開設の機運を促進せしむることとなるでせう。

ハ、一般家庭に於きましては

少くとも一週一回は家族一同が一堂に集ります。そうして佛前に禮拜し、各自が静かに默想して過ぎにし一週間の行爲を反省します。

一同の氣分が淨いものになつた頃、父兄は懇ろに訓話をいたします。それ

から皆んなでサンブツ歌を合唱し、經文を讀誦して、御佛様の御徳を讃へます。

かくすることに依つて落ちついた充實した而かも歡びに満ちた一家團樂の味ひを得ることが出来ます。家庭訓育は、嚴格に過ぎては温かさをかく冷い家庭となり、慈愛が過ぎては放縱な子弟を作ります。

この集りの父兄の訓話には本書を利用されたい。

一、本書を纏むるに際しては先輩諸先生の御高著に負ふ所誠に多大であります。又藏書の總てを貸與下された沙川泰仙師、陰に陽に激勵を賜つた關了悟居士、其他修養會幹部諸兄、印刷に關して便益を計られた矢張左馬紀氏、東奔西走の勞を盡された岸田君、表紙文字をものせられた多田空外

居士、並に原稿の一部を浄書された安達様の御助力を銘記して深謝いたします。

一、幸に本書が日曜學校經營の一參考ともなり家庭訓育の一助ともならば望外です。

尙先輩諸先生の御叱正を得ば幸甚です。

大正十五年二月

神戸瀧道にて

西村 至遊

謹識

凡例

一、この教話全書は本校従來の教材と本校兒童を基準に簡潔を旨として編纂いたしましたから、教師の方に於て適宜引延ばして布演されたし。

一、教話中の佛の組・法の組・僧の組等の文字は便宜本校に準ひ左の區別を示します。

佛の組——尋常五・六年生及それ以上

法の組——尋常三・四年生

僧の組——尋常一・二年生

合訖とあるは佛の組と法の組、或は法の組と僧の組、或は

又佛・法・僧三組合級を意味します。児童は單調を嫌ひ且つ兎角他の級の話を聞きたがるものですから時折之の合級教授を必要とする場合があります。

説話とあるは大淵小華先生の出席獎勵スタンプの解説を便宜収録したものです。

- 一、教授時間割は別表時間割を御参照下さい。冬季と夏季は約一時間の差を設けることが必要であります。
- 一、甚だ少數ではありますが、本校採用の「サンブツ歌」七種許り添付致しました。

佛教日曜學校教話全書目次

日校經營と兒童教化の必要	一
日曜學校經營六ヶ年の實驗談	七
第一章 日曜學校の使命	七
第二章 日曜學校の名稱	一〇
第三章 設備	一一
第四章 組の編成に就て	一三
第五章 兒童の登校繼續の方法	一三
第六章 大會を開設する必要	一五
第七章 根本方針	一六
第八章 教授課目に就て	一九
第九章 夏期と兒童の修養	二三
第十章 兒童教化に童話劇と音樂の必要	二四

第一篇 四月の分

- 第一章 四月第一日曜日……………二七
説話―入校式
- 第二章 四月第二日曜日……………三〇
説話―花祭り
- 第三章 四月第三日曜日……………三三
説話―佛教の傳來―卜占と御名前―救ひ
- 第四章 四月第四日曜日……………四一
説話―禪宗の起原(一)―御勉強と坐禪―仙人の涙

第二篇 五月の分

- 第一章 五月第一日曜日……………四七
説話―禪宗の起原(二)―生物を憐む
- 第二章 五月第二日曜日……………五二
大阪落城―禪宗の起原(三)―物思いに沈ませ給ふ太子―規誓上人
- 第三章 五月第三日曜日……………五九
コロンブス―藤見遠足

第三篇 六月の分

- 第四章 五月第四日曜日……………六一
海軍記念日―三つの立派な御殿―飲めない水
- 第五章 五月第五日曜日……………六七
忠孝―太子様の御結婚と四門御出遊―ピンゾル尊者
- 第一章 六月第一日曜日……………七七
米艦渡來―聖徳太子―氣高い出家の姿―觀音様を信じて居た少女
- 第二章 六月第二日曜日……………八五
徳川光圀―大菩薩行基―御出家―弘法大師さま
- 第三章 六月第三日曜日……………九五
七つの襷―鑑眞和尚の志氣―森のわかれ―愁深い愚人
- 第四章 六月第四日曜日……………一〇六
加藤清正―傳教大師―苦行の問答―悪口

第四篇 七月の分

- 第一章 七月第一日曜日……………一二五
螢―弘法大師―ゲインバサー―五―七夕の紙飾り(手工)

第二章 七月第二日曜日：……………一三三

七夕―過を改めよ―六年の苦行―日蓮上人

第三章 七月第三日曜日：……………一三七

盲目さん―友を擇べ―乙女の供養―成功を急いでほだめ

第四章 七月第四日曜日：……………一四〇

太田道灌―林間の集ひ

第五篇 八月の分

第一章 八月第一日曜日：……………一四三

海水浴―清潔―マ―ラの誘惑とお悟り―よい友、わるい友

第二章 八月第二日曜日：……………一五〇

斬髪―光陰を惜しめ―一番最初の御弟子―法然上人

第三章 八月第三日曜日：……………一五九

盆燈籠―お盆のぼちまり

第四章 八月第四日曜日：……………一六二

河の水―地藏祭り

第五章 八月第五日曜日：……………一六八

天長節―禮讓―耶舍めざめ―傳教大師

第六篇 九月の分

第一章 九月第一日曜日：……………一七七

始業式―汽車―慈悲―佛陀と毒蛇と三迦葉―自ら生ける者を殺せば殺生の罪あり

第二章 九月第二日曜日：……………一八五

汽車―同情―竹林精舎―聖應大師

第三章 九月第三日曜日：……………一九二

加賀千代―愛語―舍利佛と日蓮―心の迷ひ

第四章 九月第四日曜日：……………二〇一

満月―寛厚―大迦葉

第七篇 十月の分

第一章 十月第一日曜日：……………二〇九

佛教の傳來―和光同塵―淨飯王の使者―自分を傷けても他を助

第二章 十月第二日曜日：……………二一八

龍樹菩薩―達磨太子様のお話

第三章 十月第三日曜日：……………二三四

運動會―山遊び

第四章 十月第四日曜日：……………二三六

第八篇 十一月の分

二宮尊徳―四苦―ウケインのお迎えへ―やまとだまし

- 第一章 十一月第一日曜日……………二三七
- 九色の鹿―八苦―佛陀の祖先―のどかな中のかなしみ
- 第二章 十一月第二日曜日……………二四六
- 小野道風―三歸―ヤシヨダラー夫人―三時殿とヤスダラ姫
- 第三章 十一月第三日曜日……………二五三
- 鼎―三毒、三界、三學―難陀とラゴラの御弟子入り―四門の出遊び
- 第四章 十一月第四日曜日……………二六三
- 佐倉宗五郎―太祖常濟大師の御幼時
- 第五章 十一月第五日曜日……………二六六
- 却鸞上人―孝行と御勉強―理髪師ウバカー―一休禪師

第九篇 十二月の分

- 第一章 十二月第一日曜日……………二七五
- 釋尊の出城―諸寺開創と化導―光り輝く黄金の土地―村を救った少女
- 第二章 十二月第二日曜日……………二八五
- 富士川―大木山總持寺―悪いすゝめに従ふな

第十篇 一月の分

- 第三章 十二月第三日曜日……………二九五
- 酒の壺―馬鳴菩薩―淨飯王の死―じまん
- 第四章 十二月第四日曜日……………三〇八
- 年の終り―暮のあつまり
- 第一章 一月第一日曜日……………三一
- 濱の老松―六波羅密(一)―お木盆を生んだ娘―うづらの話
- 第二章 一月第二日曜日……………三二三
- 羽子―六波羅密(二)―提婆の悪いたくらみ―生きものを愛せ
- 第三章 一月第三日曜日……………三三五
- 奴さん―文珠丸―提婆の失敗―草木を愛せ
- 第四章 一月第四日曜日……………三四九
- 巴―承陽大師の御降誕
- 第五章 一月第五日曜日……………三五四
- 雪合戦―道を求めつゝ―阿闍世王の後悔―文珠丸の家出

第十一篇 二月の分

第一章 二月第一日曜日……………三六三
 節分—法によつて正す—死なぬ家—美しい鷺鳥と醜い鳥

第二章 二月第二日曜日……………三七六
 鴨越—學業を終へて—娑羅双樹—手足の無くなつたお姫さま

第三章 二月第三日曜日……………三八七
 お釋迦様のおさと—曹洞宗寺院の始め—御涅槃會

第四章 二月第四日曜日……………三九八
 梅の春—大木山永平寺—最後の御弟子—きまりよくせよ

第十二篇 三月の分

第一章 三月第一日曜日……………四〇八
 お雛さま—北條時頼の接化—佛陀のお涅槃—ひがみ心を出すな

第二章 三月第二日曜日……………四一九
 青い門—恩賜の紫衣—獅子の運命—共に楽しみ

第三章 三月第三日曜日……………四一九
 スエズ運河—聖徳太子

第四章 三月第四日曜日……………四三四
 親虎と兒虎—進級式

第十三篇 附 録

競争遊戯……………四三七
 めくら鬼—子殖し—助け船—場所取り競争—廻り鬼

會歌法の光……………四四四

三歸戒文……………四四六

懺悔文……………四四七

四弘誓願……………四四八

釋尊降誕會歌……………四四九

太祖常濟大師讚仰歌……………四五一

歡喜……………四五三

童話戲上演と其功果……………四五五

童話戲びつこの松虫三幕……………四五九

聖典戲宿因の王舎城九場……………四八五

降魔三幕……………五三七

修養コードモ會日曜學校案内……………五七〇

補 追

弘誓願—三身—六道—赤い珠

目 次

10

五七七

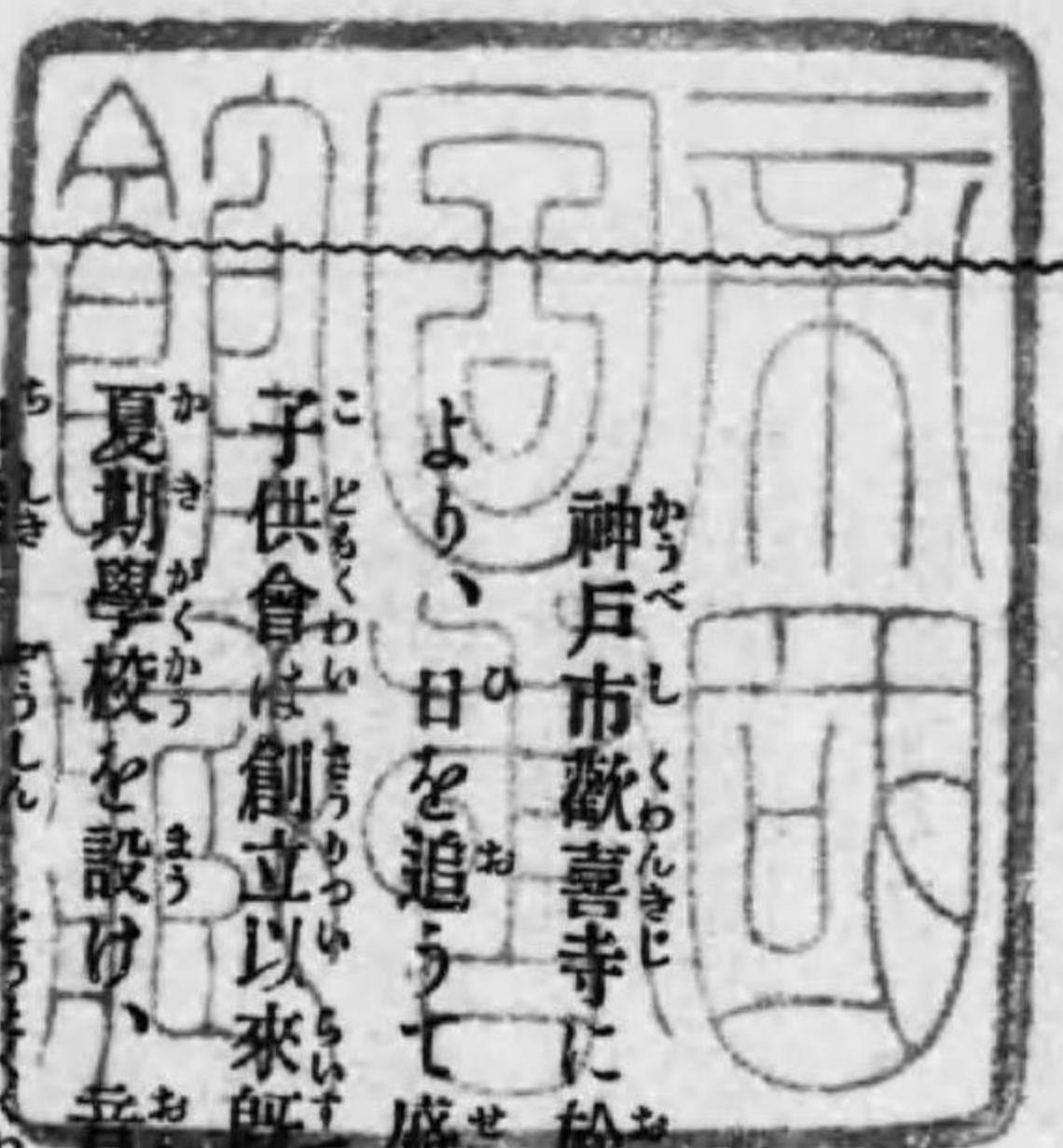
佛教日曜學校教話全書目次 終

日校經營と兒童教化の必要

神戸修養會總裁

修養コドモ會

會長 新井石禪禪師垂示



神戸市歡喜寺に於ける修養會及修養コドモ會は、住職沙川泰仙師の勇猛精進力により、日を追うて盛大になりつつあるは、國家の爲めに欣幸の至りである、殊に修養子供會は創立以來既に六ヶ年となり、其間一貫して日曜學校を開き、講演會を催ふし夏期學校を設け、音楽隊を組織し、童話劇を創し、種々様々なる方法の下に、兒童の知識を増進し道德觀念を助長し、意志力を鍛練し、優美なる情操と、高雅なる趣味性とを涵養することに努められたるは、殆ど最も喜悅する所である、神戸の如き雑沓せる都市に在り乍ら、コドモ會員の眞純なる態度を見て一層修養の偉大なる効績を経験

佛教日曜學校教話全書

することが出来た、殊に奥村愛子伊與久達子高濱静子の三少女の如き五年間毎日曜無休出席して修學にいそしみたるを聞き感歎措く能はざるものがある。

社會相が複雑の度を増すに従がひて、人心の散亂し易きは免がるべからざる狀勢である、爲めに學術益々開くるにも拘はらず、浮華放縱の習漸く萌し、人智日に進むにも拘はらず、輕佻詭激の風を生ずるに至る、抑々知識は頭腦の如く、德行は腹部及兩脚の如し、物質は装身具の如く、精神は體質の如し、知識に長じて德行に短なる、是を福助文明といふ、物質に偏して精神に乏しき是を假裝文明と稱す、今の文明は未だ福助文明假裝文明たることを免がれぬ、此の弊習を一洗して、眞に健全なる人格者を陶冶するには、少年少女時代から完全なる教化を施すことが必要である、それには教化機關として盛んに日曜學校を起す様に致したいと思ふ、衿が米國を巡錫したる際、彼の國人の多くは個人主義黃金萬能主義の様に見受けられるが、比較的公德心が向上して、社會的禮讓、公共的道義に富んで居るを見て、深く尊敬の念を發したことであつた、斯く公德心の發達したのは何の爲めかと聞きしに幼年時代から重もに宗

教家の手に依て、幼稚園及日曜學校が經營せられ、白絹の様な淨く純なる兒童に、慈母の如き愛語を以て、目上の人を尊敬しなさい、弱き人を可愛がりなさい、善い事を御樂しみなさい、小鳥や昆虫まで慮遇てはなりませぬ、神さまは正しき人を愛されます、天は誠ある人を守つて下さりますといふ風に教へ込まれる事、自然と宗教觀念が公德觀念が植ゑられる、『三ツ兒の魂百まで』の道理で此宗教觀念が全生涯を支配する程の力ある習慣性となるが爲めであると申された人があつたが全くその言の通り事實であらうと思はれた、我が國の如きも理想的に精神文化の發達を期せんには、少年少女の教化を第一にせねばならぬ、その教化機關としては日曜學校若くは日曜教會が一番宜いと思ふ、それには幼稚園を開くことが出来れば猶更結構である、尤も青年會處女會居士會婦人會を始め、一般的布教、有識階級に對する宣教も亦大々に實行すべきは勿論である。

日曜は學校の休日である。此日に於て兒童が寺院に集まりて精神的なる薰育を受け體操も行なひ唱歌を歌ひ、音樂をも聞き、數時間愉快に勉強することは、兒童の發育

上非常に有益である、家庭に在つて不規則なる遊戯に耽りては、家業の妨げともなり
 兒童の爲めにも宜くない、市町村ともに佛教寺院は少年少女の爲めにする日曜學校又
 は日曜教會を起し、日曜を濫消せしめず有益なる教育を施し、其間に宗教的感化を
 與ふことは情操薫育の最好方法であらうと思ふ、寺院數多き處は申合せの上比較的
 便宜であつて、且つ教育上適當と認むる寺院を選定して開設する様に致したい、近時
 此種の事業が各地に勃興しては來たが、未だ一般に行き涉つては居らぬ、又簡易
 なる圖書館を設けて兒童許りで無く、青年等の閱覽に供することも必要と思ふ、寺院
 は概して建造物も大きく庭も廣いに依つて兒童も喜んで通學することであらうと思ふ
 宗教の宣布は、個人本位で無ければならぬ、従前は檀家と稱して一家を以て單位と
 して居る、檀徒信徒の數を調ふるにも何軒とか何戸とか稱して居るが、是れでは決して
 現代人に満足を與ふことは出來ぬ、今後は個人を單位にして檀徒でも信徒でも何
 人として一人に宗教的教化を及ぼさねばならぬ、従つて少年、青年、壯者、老者
 皆夫々適切なる教化機關を設くる必要があるが、中にも少年教化の設備が一番不行届

の様に思はれる、是れ 衲 が日曜學校の經營と兒童教化の實行とを宣傳する所以であ
 る。

我が國は概して家庭教育が幼稚であるから。學校に於て折角教へ込んだ事も家庭に
 於て打毀される場合が多い、或る學校の校長が生徒に向つて、皆さんは御宅に歸つたな
 らば叮嚀に御両親に只今歸りましたと御辭儀をなさい、そうして御両親が何と仰しや
 るか、その様子を明日私に報告なさいと言ひ渡した、翌日に至り一人の生徒が校長
 に向ひ、私の御父さんは御辭儀しても駄目です、昨日歸りまして御父さまと申します
 と、何だ此野郎と言ひました、唯今學校から歸へりましたと申しますと、生意氣こく
 など言ひましたと報告したといふことである、こんなことで善良な教養が出来るもの
 では無い、此家庭教育の缺陷を補ふ上にも、日曜學校は必要である、殊に今の學校教
 育は科目の數が多いから、子供の頭腦では學問に食傷して十分に消化する餘裕が無
 い程である、日曜學校に於ては比較的精神教育に重きを置くに依りて、自づと道義の
 觀念を高め、精神の統一力を養ふことともなるであらう。

都會の地に於ては近時不良少年少女が追々増加の率を示して居る、それが油断をす
るとイツの間にか地方の村落に迄も感染するの恐れがあるに依て、都鄙ともに少年少
女の教養が急務である、日曜學校は學校教育の補助機關ともなり、情操教育の最良機
關ともなり、且つ將來日曜を有利に、又有意義に使用する良習慣を養なはしむる事と
もなる、敬神奉佛崇祖報恩の觀念を涵養するに於ても、最も適當なる教化事業である

日曜學校經營六ヶ年の實驗談

修養コードモ會主 沙川泰仙述

第一章 日曜學校の使命

近時文明の進歩發達は、實に目醒しいもので、これ即ち科學的の文明で、總てもの
を理智的の光りを以て解決せんとする科學萬能主義に心酔したる結果として宗教的方
面を蔑視して居る今日、どうしても根底の強き宗教心の培養を計らねばならぬ、其宗
教的培養に就ても、手近い兒童方面より教養して、知らず識らずに信念の教養尤も
緊要と同時に、文明の發達につれ、人間の本具の宗教性を刺戟誘導し以て完全ならし
むる事は、『人間の教育』の最も緊要であります、其れを完全にするには、是非共學校
教育家庭教育の外に最も莊嚴なる儀式的と、精神的感化を以て教養するの機關がなけ

ればならぬと思ひます、我國佛教界に於きましても、兒童の宗教的教育の肝要な事に現今は目を附け帝都を中心として、六都市及各地に於ても同校を經營なし、盛んに兒童の宗教教育の爲め寺院の方々が努力なさる様になりましたのは喜ばしい事であります、然しながら多くの場合は壇信徒は充分其の美譽を領解せず伽藍の使用を視てこれに反對する人があります、何んとなれば從來は佛教と云ふと『未來主義』とか、僧侶は時代遅れとかで、葬儀か法要の外は無用長物の如く、一般より見做され、又僧侶自身も其れを以て満足として居る爲め、知らず／＼に社會より遠かれて行き、寺院を無用の長物と見做された爲如上の反對をうける誤解も結局、僧侶自身の目醒めざる罪なりと思ふ、其の物資の不充分なる僧侶の社會事業として伽藍を開放なして日曜學校及幼稚園を經營することは容易に出来る事業であります、古人の言葉に『三歳兒の魂百まで』と申す通り、幼少の時分より宗教的教養を植ゑつけ、信念の培養をつとめて置けば、其の兒童が將來社會の舞臺に登り活動の上にて如何程力強く思ふ事であろうか、この點より兒童教化の功は偉大なる者で、又これ程大切なる者はありません、兒

童の宗教教育の發達したるのは基督教であります、現在に於きましても、兒童の教養の上手な、又巧妙なる事は到底佛教は基督教の經營方に及ぶ所ではありません、其の組織の點も世界的に然かも經營の方法も完全で、毎年日校世界大會を開催なして其の獎勵をいたして信徒も又充分に了解して援助して居ります、我國佛教界に於ても西本願寺は御大典記念事業として、日校を經營せられ、其れを統一的に全國に亘り其の實績も相當に擧げて居ります、他の宗派に至りては未だ完全なる經營方は殆んど無いと云つても差支ないのであります。私も其の無經驗の一人として、去る大正八年十一月に本校を組織いたし、何等の兒童心理も辨まへず、無經驗にも直接に兒童に接しては色々兒童心理を實際的に探究し、經營方も色々と實驗的に體驗して今日に及びしもなかく研究は無盡藏でありますが、私が日校を經營せし時は、現今まで發達せる經營者も少なく、其の材料に困難いたし基督教の日校を無比の手本として研究いたし、又自分で考へ、又學校に行き、或は先生が兒童教育の方法を實地に參觀致し幾多の苦辛して居りましたけれども、常に佛天の加護と其の信念と忍耐力を以て奮勵すれば、いか

なる事も必ず成就する者と確信して本會の總裁新井猷下を會長に仰ぎて、芥川小學校校長を顧問に願ひ、今日より六年前の十一月に三宮カフェーオリエントに於て發會式を挙げました。兒童は僧侶の催として珍らしさに三千名近く來集し、未曾有なる發會式を挙げました。成功か不成功か随分心痛いたしました。唯兒童が來集して佛種を植ゑつける因縁を結ばれた事は一生涯に忘じ難たい歡喜と満足とに感涙に咽びました。以來毎會は諏訪山武德殿に於て開會なして、其の教養に勵んで居りましたが、唯多數を集めるのを功とせず寧ろ少數と雖も寺院の伽藍に觸れしめて其感化力と教養とを充實させんと、遂に歡喜寺に於て、各日曜日毎に開催する事に成りました。

第二章 日曜學校の名稱

現在各地に於て經營せる日校の名稱は種々ありますが、本校は修養會の社會專業の附屬として經營する爲め修養コードモ會日校と名稱をつけましたのであります。現在各所に經營せる日校は幾分か其經營法に相違はありますが、何れも同一の意味を以て一

定の組織の下に教課が施さるべき教育機關でありますから、單なる「集り」とは區別をせねばなりません、然し寺院の状態と土地の状況等に依りて聊か組織の差異をせねばなりません、其の學校の連絡と父兄の了解が尤も必要で三方面が完全にならなくては宗教的教育を全うする事が出来ないのであります、其れは理想で實現は容易でありますから一先づ學校及び、父兄から認められほめられるまで努力するより外はありません。

第三章 設 備

同校を經營するには、先づ其の目的の示す所に従ひ、其の教養を施すに充分なる設備が最も肝要であります、今參考までに左に本校の設備を記載して見ませう。

- (イ) 教室(庫裡)講堂(本堂)教室は三間要ります。
- (ロ) 運動場(寺門の境内)開會までは自由に遊ばす。
- (ハ) 洗面所及湯呑所(浴室及臺所典庫寮)

(ニ) 日校必要器具(オルガン、教壇、テーブル、掛圖、下駄箱、黑板、鈴、申込書、會員章、出席簿、記録。)

(ホ) 日校生に持たす品(經文、サンブツ歌、念珠、修養袋)生徒に必ず登校する時は、其の修養袋に經文とサンブツ歌と念珠を納めしめて携帶させます。

第四章 組の編成に就て

兒童は各々其の年齢を異にしてゐますから、随つてその能力にも差があります。これ等を同じ場所に於て同一の教材を以て教へる事は不可能であります。本校には左の組立をいたして居ります。

- (イ) 指導部 高等科一二年生(中學生の一二年生をも含む)
- (ロ) 佛の組 尋常五六年生
- (ハ) 法の組 尋常三四年生
- (ニ) 僧の組 尋常一二年生

以上の如く三寶の名字を記憶せしむる上より、其名を以て三組の名稱と致してゐます、又特に本校の同窓生を以て指導部員を組織して此れら三組を監督せしめて居ります。

第五章 兒童の登校繼續の方法

學校教育は秩序もあり、學術の進歩を目的として、兒童の自發的よりも要求し奮勵勉學し、又父兄としても中學入學難の關門ある故に油斷なく注意して其の進歩を計る爲め、學校、生徒、父兄、等の連絡が必要であります、宗教教育は義務教育と違つて強壓的に出席せしめねばならぬといふのではなく兒童も父兄も自由なるが故に其の責任も義務的精神も無い兒童を引附けるは實に困難であります。無論兒童は初めの中は珍らしいの一つは好奇心のため存外澤山に出席いたしますが次第に厭きて來ると遂には感情の衝突に宗派的觀念より父兄が兒童を出席せしめぬ様したりして多數は減少するものでありますから常に兒童に厭かさぬ様に先きくと樂しみを持たしめる

より外はないのであります、其の極く責任の軽い、持續心の薄い、倦み易き兒童を如何にして繼續さすかは、校主の手腕にあります、先づ出席獎勵法としては本校にては、先づ來校する兒童を順次に、住所氏名を登録した『スタンプ帳』を呈す、御二回は其のスタンプ帳に張る印紙を呈し、其の印紙は兒童に貼らす、三四回は會員章五回目は念珠、六回目は修養袋と、順を追ふて一品づゝ日曜毎に呈して、其の間には御友達も出來其の趣味も持つて、不知不識の間に物品の揃へるを樂しみとして宗教味を知り遂に三ヶ月も出席する様になります、兒童の心理の状態は、學問上の心理學では到底圖り知る處でありませんが、實際に兒童に接して見ますとなか／＼研究する餘地は澤山あります、而して友達と誘合せて來た場合は聖德太子の拾二枚續きのカードを友達の数に依りて枚数を呈し、贈て拾二枚揃へば賞與を呈す、其の拾二枚を揃へる間に聖德太子一代記を讀みて遂に記憶せしめて佛教と皇室の關係を深く印象せしめるのであります、止むなく兒童が日曜日に休校する場合は次回の土曜日に『いらつしやい御待ちして居ります』と云ふ文句を以てはがきで報知します。すると非常に喜んで出席い

たします、兒童は極く熱心に日曜毎に出席して居つても、一寸の事より休校する事がある時、次回は氣まわり悪るがる者であります、教に報知をすると云ふのは校主と兒童の親密の關係を結ぶ上にも必要であります、雨中の場合は特にカードを呈して其樂しみを増して居ります。三ヶ月を一期として皆勤者には賞與を呈して獎勵して居ります又一ヶ月に一回か若しくは二回は學校の了解を得て校門か運動場に案内を掲示したり又宣傳ピラを校門に立つて校生に配布して、不斷の宣傳に努力せぬと減少して遂には一人も出席せぬ様になるものであります。

第六章 大會を開設する必要

春は釋尊の花まつり、夏は地藏盆、秋は秋まつり、冬は御涅槃さまと、年に四回の若しくは五六回に亘り、大會を開催して宣傳するに努力せねばなりません、其の大會の會場は學校の講堂が一番適當であります、其の大會を開催する順序と其の方法に就いては、種々方法がありますが、先づ開會までは、會場内に入場せしめず、校庭

か寺門なれば境内で自由に遊ばして、開會前の五分間程前に先づ幼稚の男女より二列にて會場へ入れ場内には男女別席せしめて、必ず履物を包ませ、携帶せしめ又閉會の時には其の履物の紙を其の講堂に捨て置かすに、必ず持ち歸へらす方法に訓練せしむるのが宗教團體の尤も注意すべき事柄であります。

第七章 根本方針

學校は學術の進歩を目的とし、日校は宗教心の涵養を目的として居ります、學校教育と宗教教育と一致せなければ、眞の人間を造る事は出来ません。

不良少年の原因 其の原因は境遇と遺傳の二方面であります、大酒を呑み、又梅毒を感染せし親の其の子は腦其の他に異狀がありまして、其の原因の爲めに生理的の偏性より盗みしたり、所謂胎教妊娠中の不節制より生れつき不良となり、又両親に死に別れ精神的より僻み孤獨より不良となり、家庭の不秩序等より不良となり、餘り親が子供の御氣儘にさせ過ぎて放逸怠惰浪費亂暴等となり遂に不良となる、其の不良少年

になる原因數々ありますが、要するに學校教育のみに頼み過ぎ家庭教育を放任して宗教教育の必要を感せず、學問萬能主義に進歩する現代に於ては是非共『三歳兒の魂百まで』の喻へもあり、信念の培養に夙み、信仰の力に頼りて感化せしめて幼少より勿體ない有難いと云ふ觀念に住せしめて『何事のおはしますかは知らねども忝けなきに涙こぼるゝ』の西行法師の歌の如く、偉大なる御佛が善惡表裏の區別なくお見通しになりて、而して夜も日も我等を御護り下されて其の慈悲深き御佛に御繩りして人の目に見えぬと雖も悪い事は出来ぬ様な觀念を兒童の腦裡に注入せしむると同時に宗教上の法式に參列せしめて嚴肅と其の敬虔なる思想を涵養せしめて『威儀即佛法』の御教へを示し、又其の教養の任に當る教師も行住坐臥の振舞も微細の點まで注意して、教養に努めぬと、兒童は其の缺點を見る妙を得て、喻へば先生は欠伸なされた足を投げ出して居られた、泥酔して人と喧嘩をして居られたと云ふ様な恐い態度を見つけられ、時には兒童より馬鹿にいられては其教養の功はありませんから、教師が御伽講演をする時には必ず眼をむいたり大口を開いたり、餘り手眞似をしては却つて滑稽とな

つて輕卒に見られますから、私等は御御断は必ず其の専任講師に譲りて法話と訓示のみして、校主は校主らしく、其の態度を以て敬虔と威嚴とを示し而して慈悲深き觀念に住し偏愛にならず、幾拾人と雖も慈母が愛兒を見る如きの觀念を以てそうして法服を着し、威儀を調べて、其の任に當らなければ日校の主旨に反します。俗服を以て教養する程なれば、特に僧侶が兒童を教養せずとも、既に學校にても修身科もあり、校長先生よりも訓示があります、僧服を着して、敬虔の念を起さしむる處に、日校の生命もあれば又目的も達するのであります、久留島武彦先生は御僧侶は特に色衣でも御召しなされた方が兒童の宗教心培養上効果がありますと、去る大正十年四月御來神の際に御教示下されて、私は其の御教示以來、其れを實行して、先生の御懇切なる御教示を感謝して居ります、毎年本會總裁新井禪師猊下御來錫の際は、必ず大會を開いて兒童にあの偉大なる御人格と御高德なる御容姿に接せしめて、恰も生佛を拜顔せしむる觀念を以て合掌禮拜せしめて、尊い御法衣の慈悲の御袖に纏らせて宗教心の培養に努めて居ります。

第八章 教授課目に就て

(イ) 教授の仕方。教授の仕方に就ては前回の日曜日に教へた科目中より尤も肝要なる事柄を質問するのです、『道元禪師』は何宗の開祖で、其の宗名は何と名づけられますかとか、『三界とは』と問へば『欲界色界無色界』と答へしめたりする、尋常五年以上は近頃は中學準備學で非常に學問の向上發達して居る時で特に數學上の數字より『三世』とか『四恩』とか『五觀』とか『十善』とか『二十五菩薩』といふ様に數字のより其れに關する宗教學を教授するのが一番注入し易く、又漢字の素養を造らしむる上にも、『涅槃』とか『菩提』とか『眞如』とか『實相』とかの普通學で學ばぬ宗教的の熟字を教へ法の組では釋尊は何れの國何れの地で御生れなりしやと質問して、釋尊の御生れの事情を知らしめ、僧の組には御佛様は何んな方で御慈悲深い我等を救ひ給ふ御方と答へせしめて自然と佛學を研究せしめて居ります。

(ロ) 規律の肝要。先づ開會の時間は、冬は午前九時、夏は八時として、其の時間の

初まるまでは、寺門の境内や庫裡の一隅にて自由に遊ばし、境内では『鬼ごっこ』『繩飛び』『毬り投げ』をせしめ、室内では児童文庫を設備して、其れを自由に讀ます、鑿て時間が迫ると半鐘を鳴らして庫裡の大廣間に集め、其より佛法僧と三組を、僧より順次二列として本堂の正面に整立せしめて、禮拜讀經の上一場の訓示をし、元の大廣間に歸りて各の組に別ちて教授をする。約一時間すれば充分であります、其れが終ると五分間休息して御伽會に移る、時間も約一時間午前十一時頃に閉會するのであります、而して毎月一回は中食を呈するので、其れは前回に回向袋を持たせて其れに献米をせしめて其れを持ち來らして其れを焚出して『豆の御飯』か『人參御飯』にして供養箱に結め、これを児童に分ちます。児童等は非常に喜び舌づゝみを打つてたべます。かくすることは佛飯の尊さを感せしめる善巧方便であります。

(ハ) 禮拜の順次 先づ庫裡より二列を以て本堂講堂の正面に靜かに起立せしめ、正面に奉安せし『今上天皇の聖壽牌』に仰伏して、『君が代』を合唱せしめ、次で靜座の上、合掌して『懺悔文三唱』『歸依文三唱』『般若經』異口同音に讀誦せしめて、御佛

への誓願と互の幸福を祈り、約五分間は默想して精神の統一を計りて校主訓示の後『四句誓願文』を合唱して大廣間に歸る。

(ニ) 經文を児童に讀ます必要

児童の腦裡には、經文の意味は別りませんが、唯有難い物と思ふ心はあります、而して、『般若心經』は一般に通じて讀みよい經文ですから児童に二三遍練習せしむるとよく讀む様になります、而して朝夕家庭で讀ますと遂に其の感化で一家が揃つて讀む様になる。丁度流行病に豫防注射する様に、其の注射の爲めに悪病を除くが如く一生其の児童の頭には忘れられない印象をのこして功德は甚大であります。

(ホ) 教授課目に就て 教授課目は眞宗では『正信偈』と『讀佛歌』を以て其の材料とし、基督教では、『聖書』を以て教材とする故に世界的に統一して古代より長き經驗を持つ居る、故に手本として研究する事は澤山あります。

本校では『七拾五法名目』、『日本高僧傳』、『釋尊一代記』、『佛教讀本』等を参照して其れを平易に作製し、謄寫版で印刷して其れを家庭に持ち歸らしめて、父兄にも

讀ましめ又佛教研究の初歩とし參考にせしめて居ります。

(一) 日校經營と經費 日校經營には經費が一番困難にて、此等の爲めに、地方寺院が經營せられぬ様に思ひます、其經費を寺院の青年會か修養會か婦人會の經費の内より支出する様にして、直接日校の經費として生徒より徴收したり、父兄に頼んではいけません、其の父兄は會費まで支出して出席せしむる熱心な人は少ないから、無料公開し進退共自由として父兄より自發的に寄附をせしむるまで進む様に努力せなければなりません。

(ト) 同窓生を如何にして繼續せしむるか。

日校に永く出席して既に青年期に到ると、青年團員とし青年團を組織爲し、其して『御伽の研究とか音楽の研究』とか外色々なる社會奉仕的の事業をして修養を勵む様に其機關を設けて、其れを繼續せしむるのであります、青年期に成りますと兒童の如く自由を失ひ其境遇と事情の免る事の出来ない爲め、喩ば百人の兒童なれば青年期に成ると、五人程より残らぬ様になります、然し一度兒童に佛縁を結ばしめ、佛種

の注射をしてありますと、必ず良薬の功果は奏する時節が到来して、本當に兒童の時の如く純真なる信念に歸りて、初めて其れ等の人々が兒童期に於ける日校生徒方々の御骨折りを思出して眞實より感謝する時が來るのであります、近き希望を描いたり、見聞的なる輕薄なる精神では、到底經營する事は出来ませんから餘程の信念と努力が必要であります。

第九章 夏期と兒童の修養

宗教家とし社會事業として尤も容易く其の成績の上るのは、兒童の暑中休暇中を利用して、伽藍を開放して、夏期學舎を新設して、中學準備學を教へたり、復習をせしめ又餘材として宗教々育として經文の練習より、坐禪の作法等を教へて、伽藍に觸れしめて信仰心の培養を計るのが尤も有益で學校側としても非常に喜び、無論父兄も感謝して下さいます、本校は夏期學校を經營する事三年間にして少々研究もいたして居ります、山間や田野の地方にして其の事業の希望者あれば實際の經驗談をいたしたい

事と思ふて居ります。

第十章 兒童教化に童話劇と音樂の必要

本劇團は純真なる人間味と宗教味とを加へて兒童に經驗的と藝術的より眞實と興味とを快樂の内に徹底的に情操及信仰を注入せしめて其の功は實に巨大であります、今回文部大臣より學校劇に就て禁止方の訓示がありまして、本團の如きは五年間の經驗に依りまして何等の弊害もなく其の精神教化の實を擧げた事は枚擧するに遑まありません、昨年は東京名古屋へ、今年は九州地方の招きに應じ出演いたしました、熊本市の如きは宗教團體の催としては未曾有の來集と盛況とで幾十萬の上下貴賤の差別なく教化して佛縁を結ばしめた、本校童話劇と云ふ民衆教化は武器の御蔭であります、然し本團の劇は純宗教劇のみを特に男子のみで出演して女子を出演せしめず其の出演者は十六七歳の青年のみでいづれも總裁院下より沙彌號を授與して菩薩の淨行として化他を目的として居ります、音樂も兒童の精神に調和をなし秩序の靜肅を保つ

上彼等に趣味を有し快樂の感じを宗教的に誘導し、宣傳等の時に尤も必要な故にこれ等設備も必要です。

結論

種々と形式と組織の方法は多々ありまして、畢竟するに經營者の鞏固なる信念と忍耐力と物質的の力に頼らずんば、斷じて成就する者ではありませんが其の熱心と努力に依りて必ず財力は伴ふ者でありますから考量せる宗教家はよろしく決斷力を以て一日も早く全國的に催さん事を希望して止まないであります、宗教家の社會事業としては、伽藍を開放して兒童を教養するか、幼稚園を經營して社會教化するのが最も困難で而かも容易に實現する者であります然しながら一時の名譽とか一朝の成績を見ん爲めに開放するのでは寧ろ初めよりせぬ方がましでありますから、永遠の理想と無畏施の功德を感じ勇猛精進し決行する所に諸佛菩薩は冥護を垂れて無限の歡喜と無盡の大慈に浴して自利自他共に悟りの彼岸に到る時節があるのです。

未熟なる私の過去六年間に互る實際的の經營談と實驗的宗教兒童心理學を研究した其の一端を述べて、諸君の參考材料となり無上の光榮に浴するを得ば、創立五週年記念を祝福すると共に深く感謝して一層研究を積み、以て兒童教養の目的たる『學術』『宗教』『家庭』の三方面の教育が完全に發達を遂げん事を誓ふ次第であります。

第壹篇 四月の分

訓 杖

恩		四	
主	父	師	友
君	母	長	友

正道なれ、親切なれ、優美なれ、而して

専ら忠孝の道を勵み「誓て四恩に報ひ」

世の模範たらん事を期すべし

—新井石禪々師猊下御教訓—

第一章 四月 第一日曜日

説 話

神武天皇は鵜草葺不合命の一番末の皇子で十五歳の御時太子とられました。そうして御年四十五歳までは日向の高千穂の宮に御住居でありましたが、餘り西すぎて、日本全國を治めるには不都合でありましたから、とうとう大せいの家來を率きつれて東國を御征伐にお出でかけになりました。

あちらにも、こちらにもたくさんの悪者共が居りますので、非常な困難を遊ばしました。

或時は道に迷つて困りましたが八咫鳥が出て来て道案内をしました。又或る時は一番強い賊でなか／＼降参いたしませんでしたが、この時も金色の鵜が現れて天皇の御弓の上へ止り金色のまぶしい光を賊に射たので天皇の軍の大勝利となりました。すつかり悪者共を平けて大和の橿原宮で日本の一番始めての政治をなさいました。四月三日は神武天皇様のおかくれになつた日であります。

各組合級 入校式

今日からは新しい御友達が多勢この日曜學校に來られるやうになりました。
 只今新しい方の御名前を御紹介いたします。(新人校者の氏名を讀み上げ)
 今讀み上げた方が皆様の新しい兄弟なのです。御佛様を御父様として仲よくし、御佛様の御子として辱しくない丈の行ひをせねばなりません。

以前から通つてゐらつしやる方々は一年以上五ヶ年間の長い月日の間一日も休まず熱心に日曜學校に通つた立派な方許りであります。ですから先月立派な御褒美を校長様から戴いたのです。

新しく入學した方も舊い人達に負けないう様に精を出して毎日曜御出で下さい。熱心な方には又美しい御褒美を差上げます。

さて皆様、一年間休まずに日曜學校に來られる爲には、精進といふことが大切です。

精進といふ事は、佛様の御命日に御魚をたべないといふ様なこと丈ではありません。一口に言ふと勉強する、と云ふことでありますが、もつと意味の強いもので、正しい道に向つては、よしや百難が横はつてゐようとも一旦決心した以上は、その目的にまつしぐらに突き進んで行くと云ふ事であり、之の心で勉強さへすれば、如何なる事でも成功しないものはありません。

世の救ひ主であるわが御釋迦様は惱み苦しんでゐる人々を救つてやらふと御決心遊ばされて、何不自由のない皇太子でありましたが、そんなものはお捨になつて、お城をぬけ出で山へ御はいりになりました。そうして六年と云ふ長い間、其の山の中で一日に僅か御米一粒位をめし上つて、あらゆる苦しい御修業をなさいました、或時は氣絶遊ばした時もありましたが、常に社會の衆生を救ふてやらねばならぬと云ふ大きな目的に向つて、あらゆる誘惑や苦しみに打ちかつて、遂に御悟りを開き釋迦牟尼佛として天地のある限りは尊び敬はれるお方となりました。

之は實に精進の力に依るのであります。

第二章 四月 第二日曜日

説話

四月八日は御釋迦様のお生れになつた日です。

お釋迦様は、印度のカピラ國の王子で、今から三千年餘り前の四月八日、ルンビニ公園で、お母様の右の脇から御生れになつたのです。

花まつりの日、お釋迦様のお頭から甘茶をかけませう、あれは御生れになつた時降つた甘露の雨をかたどつたのです。

日本最初の佛生會は推古天皇の御時であります。

それから、仁明天皇の御時に傳燈大師様を宮中へよんで、五色の水をお釋迦様にかけて、灌佛のお式をなさいました。

各組合級 花祭り それぐ趣向

御釋迦様の御降誕

この廣い世界の中で、一番偉い人は誰かと問ふならば、直ぐ御釋迦様と御答へしなければなりません。御父様は淨飯大王と申す國王様です、お母様は摩耶夫人と申して、心の優しい親切な、そして氣高い美しい御方でありました。

春四月八日、お里歸りをなさるとして、大勢の御供を伴つてその途中にある藍毘尼と云ふ公園まで來ました。百花咲き亂れ、鳥は喜ばしげに歌ひ、蝶は樂しげに舞ふてゐる麗らかさに、此處で一才お休みにになりました。

御妃があたりの景色を眺めて居ると、美しい無憂樹の花の一枝がお目にとまりました。それから、右手でそれを手折らんとした時、忽ち御妃の右の脇から御光がさして、玉の様な立派な王子がお生れになりました。此の方が即ち我釋迦如來様です。この御釋迦様はまだ今生れた許りだのに一人で、つと立上り給ひ、北の方へ七足御歩きになつ

て、『此の宇宙では自分こそ一番えらいのだ』とお唱へになりました。其の時右の手は天を、左の手は地を御指しなされたのです。天地を救ひ給ふ御釋迦様が御生れになつたと云ふので、天からはコンバラダの花がしつきりなしに降つて来て其の御殿は花の御殿の様になりました。

四月八日の花御堂は之から来たのです。

御釋迦様は御成人してから十幾年の御苦行の末、世の中の如何なる寶よりも貴い有難い御教を御開きになりました。

朝日輝く藍毘尼の

み園をかざる百の花

わけて色ます無憂樹の

霞のなかに釋尊は。

産聲高く生れいで

手をもて天地を指したまひ

天上天下獨尊と

唱へ玉ふぞたふとけれ。

われらもやがてみほとけの

高き教へに身をゆだね

すぐなる道心ふみゆかば

さとりの園の春風に。

こころの花もさき初めて

忠孝仁義の實を結び

此の身ながらの常樂の

法のうてなに生れなむ。

釋尊降誕會御歌

新井石禪禪師作

第三章 四月 第三日曜日

説話

花園の花が一面に美しく咲き揃ひました。

第一篇 四月の分

ラエツの國の王様のいひつけで、家來達は香りの高い花をつんでゐました。そこへ御釋迦様が御通りかゝりになりました。

家來達はお釋迦様の氣高いお姿を見ると、王様の命令も何も忘れて、今つんだばかりの美しい花を、お釋迦様の爲めに前へ振り撒きました、そうして御教をお聴かせ下さいとねがひました。

お釋迦様は家來達の心がけの良いのを、大そうお褒めになりました。然し王様からいひつかつた花をまいて終つて、どうするつもりかとおたずねになりました。すると家來達は

『王様が怒つて、若しこのまゝ殺されても、御佛様のお話さへ聞いて置けば死んでからとんなに幸福だか知れません。』と申しました。

御釋迦様は家來達の爲に、有難いみ教を御説きになりました、それで家來達はつきの命を得ました。

佛の組 佛教の傳來

佛教の本邦に傳來した年代に就ては、學者の間に種々の異説があります、或は繼體天皇の即位第十六年に南梁の司馬達等なるものが來邦して、大和阪田ヶ原に草堂を構へ佛像を安置して之を禮拜したと云ふ傳説に基き、之を我國佛教の最初とする等と云ふ説も色々ありますが、最も普通に信せらるゝものは、欽明天皇即位第十三年十月十三日、百濟の聚王明禮が、使をして金銅の釋迦佛像及幡蓋經淨等を奉獻せしめ、表文を奉つて佛の功德を讚嘆したと云ふのが、佛教傳來の起原であります。

天皇は佛教の採否に惑ひ給ひ、群臣を召して御下問になりました、大臣蘇我稻目は崇佛を主張し、大連物部尾興は排佛を主張しました。日頃から勢力争ひをしてゐた蘇我、物部兩氏はいづれも其の主張を譲りませんでした。

斯くの如く朝臣の間に異議を生じましたから、天皇は直ちに朝廷の神となし給はず試みの爲め稻目に賜ひて禮拜せしめられました。稻目は悦び向ヶ原の自邸を寺として

向原寺と號しました。是が本邦最初の寺院でありました。

爾來事毎に物部、蘇我兩氏は反目をしてゐました。

敏達天皇の御時、疫病が大流行したので物部尾輿の子守屋等は佛教崇拝の故であるとして天皇に奏して自ら蘇我氏の宅に至り、向原寺の大殿を焼き佛像を難波の堀江に投げこみました。

翌年天皇崩御して用明天皇（第三一代）御即位におつきになりました。御子厩戸皇子は、信佛の御志厚く身を以て佛教を代表せられた御方でありましたから、蘇我氏の勢力も漸く強くなりませんでした。

そうして用明天皇になつてからは、初て豊國法師を公許して宮中に入れられました。用明天皇崩御の後、排佛派は穴穗部皇子を立て、崇佛の太子押阪彦人大兄皇子を廢しようとするの陰謀があらはれ、此に蘇我馬子は炊屋姫皇后の勅を奉じて討伐に向ひ遂に排佛派の物部氏を滅ぼして終ひました。かくして遂に崇佛派の大勝利となり、今日の佛教をいたしたのであります。

法の組 ト占と御名前

ルンビニー公園で、王子さまが御生れになつたと言ふ知らせをお聞きになつた大王さまのおよろこびは非常なものであります。

傳へ聞いた國民も心から御祝いたしました。

直に母子をお城へお迎へしました。

其の頃、ヒマラヤ山の麓に住んでゐるアシダ仙人と云ふ名高い占の博士があらしました。王子様のお生れになつた時に色々な目でたい瑞象がありましたから、大王様はこのアシダ仙人をお招きになり、王子様の前途を占つてもらふことになりました。

仙人は早速御殿に参りました。そうしてつくづくと王子のお顔を見てもました、が何と思ひましたのか涙をハラ／＼とこぼしました、これを御覧になつた大王様は大變びつくりなさいまして、其の理をお尋ねになりました。

仙人は涙をおさへて、

「大王様決して御心配遊ばしますな、私が涙を流したのは王子様に悪い相があるからではありません。まあどうか御聞き遊ばしませ。」
とアシダ仙人は語り出しました。

「この王子様は生れながらにして立派に三十二の相をそなへておられます、王子様御成人の後御位をおつぎになれば轉輪聖王となつて世男を安らかに御統一遊ばされるでせう。然し、若しも出家して御修業になればきつと佛陀となつて、迷ひ苦しんでゐる總ての者をお救ひになるでせう。けれども、私は悲しいことにはこの様に年老いては王子様の御佛様になる迄生きのびて御教をうけることが出来ません。それでつい涙をこぼしたのでございます。」と、申上りました。

世界一のよい子であるといふ大王様始め皆々の喜びはどんなであつたでせうか。お生れになつてから五日目の日には立派な學者を招いて御命名式がありました。すべてのことに通じる様にと云ふ意味で、忝達多と御命名になりました。

僧の組 救ひ

身を修むれば幸福多し

諸の悪を作す莫れ 衆の善は奉行せよ とは佛様の御教へであります此の御諭を守りて身を修むる人にこそ完全なる幸福は惠まれるのであります (新井禪師様「修養コードモ會」日々修養訓)

昔羅漢さまが、たくさんの御弟子様と一緒にゐられました。

或日羅漢さまが、ひとり、ちつと坐つて考へごとをしてゐられますと、ふと御弟子の中の一人の若い坊さまの命が、もう七日しかないといふことが思ひ浮びました。

羅漢さまは吃驚して、すぐ若い坊さまをお呼びになつて、

「おまへは暫く親の家へ遊びに行つてくるがよい、十日ばかりもしたら歸つてきなさい。」とおつしやいました。

羅漢さまは、若い坊さまの生きてゐる間に、親に逢はしてやつて、そうして親の側

で死なせてやらうと云ふ御慈悲から、かうおつしやつたのでした。

若い坊さまは、そんなこととは知らないで、大そうよろこんで、さつそく仕度をして家路につきましました。その道でたくさんの蟻が水づかりになつてゐるのを見ました。坊さまは可愛想に思つて、自分のつけてゐたお袈裟を脱いで水をせきとめて、そのたくさんの蟻を助けてやりました。さうして親の家へかへりました。それから十日ばかり親の家で楽しく暮して、何のこともなしに御師匠さまの羅漢さまのところへかへりました。羅漢さまは無事に歸つて來ので大そう喜ばれました。けれども不審に思ひましたから、またちつと御考へになると、全くたくさんな蟻をたすけた爲に、結局自分の命が延びたのだと言ふことがわかりました。

羅漢さまは大そう坊さまの善い行ひを御ほめになりました。

第四章 四月 第四日曜日

説話

コルシカ島の貧乏貴族の家に生れたナポレオンは、とう／＼フランスの王様になりました。小さい時からまけぬ氣の子供でありました。或時他家から貰つた林檎がたになくなつてゐるので、吃度ナポレオンが食べたのだらうと云ふので御母様から大そう叱られました。處がナポレオンは『僕はたべた覚えがありません。』と、云つて白状しない。お母様は餘りの腹立ちまぎれに座敷牢へ投げ込みました。けれどもナポレオンは平氣なもので幾日たつても出ようとは云ひません。或日、妹が『林檎は私がたべたのよ。』と、云ひ出した。お母様は吃驚してナポレオンを牢から出して『妹がたべたんだつて。』と、云ひますと、『僕は始めから知つてゐます』『それなら、なぜ、そうと云はないの?』『だつて妹が可愛想ですもの。』『まあ!』これはナポレオンの七歳の時でした。

佛の組 禪宗の起原

我が曹洞宗では禪宗と云ふ語を用ひてはならないのです、單に正傳の佛法と申すべきであります。正傳の佛法を禪宗と言ふ様なものは大なる間違である、高祖承陽大師様は仰せられてあります。それは後世の人のつけた杜撰な名稱には過ぎませんが、禪宗と云ふのが人々に解り易い名稱ですから、禪宗と云ふ名義を用ひたのです。

禪と一概には云はれません。即ち禪數、禪教、禪機と云ふ三つに差別されて居ります、が之を一纏めにして禪又は禪宗と名づけてゐます。禪の起りをお話するには、何うしても今述べた三つの起原を説明せなければなりません。

先づ『禪教』とは如何なる事かと申しますと、佛教のみならず、佛法も外道も共に用ひてゐた調息の法であります、數と云ふ文字が何故附いたかと言へば、息を數へる所から云つたもので結局禪數とは禪の數息法と云ふ意であります。そうして之を佛法が開ける以前から、印度に於ける外道の宗派は多く用ひました、中でも瑜伽外道は、

數論と云ふ外道の教理を其儘採用して是に禪定を加へて呼吸調息の法を工夫したり、數十種の坐り方を作つて、なか／＼盛んであります。斯の通り釋迦如來様以前から一種の調息法は儲かにあつたのであります。そうでありますから禪教と云ふものは、お釋迦様よりズット以前に既に外道に用ひられてゐたもので、之等を考へると禪宗は如何にも古い宗旨であることが解ります。

只今の正傳の禪宗とは違ひますが、禪宗の一部分は既にお釋迦様より前からあつたもので、三千年以上の古い宗旨であります。

かくして息を調へ體を調ふことを禪數と云ひました。

法の組 御勉強と坐禪

悉達多太子様が生れて、喜びに満ちてゐる王舎城にも悲しいことがありました。それは太子様の母夫人が、太子様のお生れになつてから七日目になくなられたことです。けれども太子様は叔母様にあたるハヂヤバダ夫人がお母様となつて可愛がつていた

だきました。

もとより大王さまは、たつた一人の王子のこと、其の御可愛がり様はまた格別でありました。

かうして太子様は、健かに愛らしく御成長遊ばして七才にられました。そこで大王様は其の當時有名な學者であつたバダラン、ビシヤミツタといふ二人を先生にして色々な學問や武術を太子さまにお教へするやうにお命令になりました。

さすがは後に釋迦牟尼佛となられた丈あつて、其御發明なことは驚く許りで一を聞いて十を知ると云ふ様な御成績でありました。それで遂には習ふものもなく、讀むべき書物がない様になり、先生も次から次へと立派な先生とかへられました。果てはもう廣い印度で先生と仰ぐ人もなくなつてしまひました。

そこで太子様は、今までは外のものを見たり讀んだりして智慧をみがいたが、これからは自分の心の中で智慧をはたらかして智慧をみがかうとお考へになり、静かな庭の奥などへ行つて一人で坐禪して考へつづけられるやうになりました。

人間と云ふものも、泡の様に生れてきて泡の様に消えて行く、そうして何處から生れて来て何處へ消へて行くのか、そう思ふと何んだかほかない様な氣分になるのだ。

『けれども世の中の人のはのんきにすましてゐる。利益のためや慾のためには、みにくい姿をもしないで狂ひまわつて居る。その結果は暗い大きな穴に落ちこんで、あつ！と始めて氣がつくのだ。』

太子様はそう考へてくるともうじつとしてゐられなくなるのでありました。

僧の組 仙人の涙

富士山よりも、新高山よりも、もつとく高いヒマラヤ山と云ふ山が、印度の北の方にあります。このヒマラヤ山に洞窟をこしらへて、修業を積んでゐるアシダと云ふ仙人がすんでゐました。この仙人は其の頃印度で一番えらい仙人でした。

或日空を眺めてゐると不思議な光を見ました。それは餘程尊い方がお生れになつて

ゐるに違ひないと云ふので、はる／＼お釋迦様の御生れになつてゐるカピラへ城までテク／＼と來られました。仙人は王様に御目通りをして太子様にも會ひました。仙人は太子様の御顔をちつと見てゐるかと思ふと急にシク／＼と泣き出しました。王様始め皆んなの者はどうしたのかと心配してゐると仙人は「あゝ尊い方！ ほんとうに尊い太子さま！ 大王様 此の太子様は大きくお成りになるときつと尊い御佛様とられます。そうして世の中の憐れな人々を御救ひ下さいます。けれども私には此の寄る年波で明日をも知らぬ生命、かうして親しく太子様を拜みながら、聖い御教を知らずに死なねばなりません。私はそれが残念です。」と、申し上げました。王様始め一同は尊い御方の御生れを喜び壽ぎました。皆さん！アシダ仙人の様な大學者でさへ聞きながつてゐた聖い御教ですもの、私共は一入み佛様の御教を有難くまもらねばなりません。

第貳篇 五月の分

校 訓

德	三	
慈	操	學
愛	行	術

勤勉なれ、快活なれ、綿密なれ、而して

常に神佛及祖先を敬ひ「誓て三徳を修め」

有爲の人たらん事を期すべし

—新井石禪々師祝下御教訓—

第壹章 五月 第一日曜日

説 話

武石浩波は常陸の生れです。水戸の中學を卒業すると、北アメリカへ渡つて飛行機の研究をしてゐました。そして大正二年の春、十年振りて日本へ歸つて來ました。其時分日本ではまだ、飛行機は珍らしがつてゐた時で、大阪朝日新聞主催で飛行大會を開いて氏を招きました。そして氏は大阪から京都へ飛ぶ事になりました。其日京都深草練兵場では久邇宮殿下を始め、たくさん偉い方が、今日の氏の晴れの業を見やうと集つてゐられました。大勢の市民も喧ぎたて、待つてゐました。遠くの方で雷の様な音がしてゐると想ふ間もなく、大阪の方からゴマ粒程の小さい飛行機が見えだしました。『さア來た』と言つて皆んなは一せいに空をみつめました。飛行機はだん／＼大きくなつてきて、急に下向きになりました。『そうら着陸だ』と言つてゐる間に、まアどうしたことせう。飛行機はまるで、扇でも投げ付けたやうに、ズシンと墜ちました。『アッ!』と言つて、みんなが駆け寄つた時には、もう駄目でした。

十年間苦心研究した武石浩波は重い發動機の下敷になつて死んでゐました。
『人間の命といふものは、はかないものだなア』と、見てゐた人は、誰一人として泣かない者はありませんでした。

然し、この武石氏の死んだことが、日本の飛行界の爲めには、強い力添へとなりました。

佛の組 禪宗の起原(二)

前の日曜日には禪數の御話しをいたしました。今日はそれに引き續いて禪教の御話しをいたしました。

さて禪の教理は何處から出てゐるか云へば大乘經の中では楞伽經、維摩經、華嚴經、法華經、涅槃經、楞嚴經、圓覺經等を主としてゐます。それでありますから禪宗の教理の本源は先づ御釋迦様で、次いで大乘の菩薩方であります。以上の諸經は禪宗の大體を知るに肝要なものの許りであります。殊に初祖達磨大師は四卷楞伽が、非常に適切なる法門であると二祖に告げられたと云ふ程で楞伽經は餘程禪宗に關係の深い

ことが知れます。然しながら禪宗は經文に依つて立つた宗旨ではありませんから一定の所依の經は御座いませぬ。ツマリ八萬の法藏は之れ悉く禪の教を説いたものであります。一二の經に依つて立たうとする様な狭い宗旨でなく、すつと廣い／＼宗旨であります。此處が即ち高祖承陽大師様が『我宗は正傳の佛法である』と仰せられた所以であります。

然らば禪教の起りは何所に胚胎して居るかと言ひますと御釋迦様始の大乘の菩薩が唱へ出したものであります。傳説にはお釋迦様が金波羅華の花を拈じられ揚眉瞬目遊ばされた時迦葉尊者が破顔微笑した。其の時に御釋迦様が

『我に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり摩訶迦葉に附屬す』と仰せられ、之が禪宗の起りとしてあります。が實は御釋迦様が菩提樹下に於て成道遊ばされ、一見明星の曉に徹底せられた大悟底の境界之が即ち禪の根源であります。

拈華微笑は御釋迦様が迦葉に正法を附屬遊ばされた一行の儀式にすぎません。大迦葉尊者は御釋迦様の禪の根源である大悟底の境界を同じくお悟りになつたもので、

結局お釋迦様が成道遊ばされた大悟の境界が即ち禪宗の根據で、それを歴代の祖師方が心々相傳して今日に至つたものであります。

法僧合級 生物を憐む

太子様も餘程御成人なさいました。

或る温い氣持の良い日、太子様が御勉強後の運動に御庭を散歩してゐられる時、一羽の鵠の鳥が矢に創ついて空から落ちてきました。

これを御覽になつた太子様は『可愛そうに、矢に射られてゐるのだね、いゝよく、いま療してあげるよ』とやさしく小鳥をお抱きあげになり矢を抜き傷あとにはバラの花びらにたまつた露をそゝいでやりました。そしてやさしくなでたり亂れた翼をとゝのへておやりになりました。

太子様はどこまでもお心のやさしい御慈悲のみちたやさしいお方なのでした。

ですから人間の、尊い卑しいはむろんのこと、鳥も獸も蟲も魚もみんな御自分の兄妹の様でどれが一番親しくて、どれが疎いといふわけへだてはすこしもないのです。鳥でも獸でも、人間でも蟲でも同じ様に空氣を吸つて、同じ様に日の光を浴びて生きて行かねばならないのですもの、人間だけがいはつて、鳥たちをいぢめてよいと云ふことはない筈なのです。

太子さまは今抜いた矢を、そつと御自分の手頸におしあてられました。『おゝ痛い、これだけでもこんなに痛いのだもの、お前はさぞぐゝ痛いことだつたらう……』思ひやりながら充分な介抱をしてやりました。小鳥は大そう元氣になりました。

介抱に餘念のなかつた太子様はフトガンヂの森の上で悲しそうに鳴きながら飛んでゐる二羽の鵠の鳥を御覽になりました。

『オ、小鳥よあれはお前のお父様お母さまだらう、お前を心配して、あれ、あんなに啼いてゐる。早く歸つて安心させておあげ、……いゝかい、ほらお飛び！』小鳥はうれしそうに飛びあがりました。やがて親子三羽の鵠の鳥は太子様の上で輪をえがいて、たのしそうに飛んでゆきました。

第貳章 五月 第二日曜日

説話 大阪落城

豊臣秀吉の造つた大阪城は天下の名城です。然し秀吉が亡くなつた後、秀頼は小さい、淀君は氣儘、家來達は絶えず喧嘩をしてゐると云ふ様な始末で、天下は何時の間にか、ちやんと徳川家康のものになつてゐました。

慶長の年、秀頼が京都大佛に寄進した鐘に『君臣豊樂國家安康』といふ銘があつたのを、家康は自分を咒ふ爲めに左様書いたのだと苦情を申します。言ひ譯をしても何んとかかんとか言つたので豊臣の家來の大野治長といふよくない者が、そんな事を云ふ家康なら、此の際討つてしまへと言つて兵を擧げました。一度は和睦しましたが遂に家康は大軍を率ゐて大阪城を攻め陥しました。忠臣は全部討死をし、秀頼、淀君は自害をいたしましたから、豊臣氏は全く亡びました。時に元和元年五月八日のことでありました。

佛の組 禪宗の起源 (三)

禪數と禪教は既に御話いたしました。残りしたのは禪機であります。

禪機とは禪のハタラクキと言つてもよいものです。譬へば鐵砲の引金の様なもので之を引けば直ちに彈丸が發射せられるといふものであります。之の禪機は勿論御釋迦様から起つたのであります。けれども之の禪のハタラクキを形の上に現はし棒を用ひたり拂子を立てたりするのは六祖大師以後の人々からであります。

六祖大師様が御弟子の荷澤神會禪師を杖杖を持て御打ちになつた事が經文等にも見えてゐます。之が禪門で棒を行じた始めであります。

又拂子は六祖大師の御弟子であつた青原禪師の所へ石頭といふお弟子が來ました時に、

「お前は何處から來た」と尋ねられました。

「私は曹溪の會下から參りました」

と石頭は答へました。石頭はこれまで六祖大師の會下にゐたのではありましたが、六祖大師が死なれましたから青原禪師の御弟子入りをしたのでした。其の時青原禪師は拂子を立て、

『曹溪に却て這箇ありや』

と云はれました。之が拂子を用ひた最も古い所であります。斯の様に棒を用ひ拂子を立てる様な禪を形の上に現はす様になつたのは六祖以後で之の後禪が益々發達するにつれて色々なことを形の上に現はす様になりました。初めは御弟子達に解りやすくする爲めの懇切から出たものでありましたが、後には種々の藝の様になつて終つた傾があります。これでは見る目には一寸活潑でよい様ですが實は禪の本面目には少しかけてゐるのであります。

禪數、禪教、禪機の三つは終りました、之で禪宗の起りについては一通り御話し申したのであります。

法の組 物思ひに沈ませ給ふ太子

太子様が餘り毎日くふさいでゐられるので、大王様は御心配になり、どうすれば太子の心を引立てることが、出来るだらうと、御心をくだいてゐられました。

丁度晴れ渡つた或日、大王様は太子をお伴れになつて、野原へ散歩にお出になりました。

きれいな花は野原一面に咲きそろつて、何んとも云ひ知れぬよい香りが漂つて來ます。美しい蝶は花から花へと、楽しそうに飛び廻つてゐます。又蜂は忙しそうに蜜を集めてゐます。名も知れぬ美しい鳥は朗かに歌つてゐます。高く聳え立つてゐるカピラへ城からは妙な音樂の音が、春風にさそはれて、夢のやうにひゞいてきます。

まことに、のどかな、春であります。けれども、お考への深い太子には、之等がたゞ單なる樂しさには取られないのです。美しく咲き誇つてゐる花は、間もなく散る運命にあるのです。あゝ樂しそうに歌つて

ある小鳥は其の實蟲をねらつてゐるのです。蟲はまた自分より小さい蟲をうかつてゐるのです。

表面、まことに春らしい楽しさが見えてはゐますが、誇らしやかな春の色は悲哀を意味し、朗かな鳥の音も恐ろしいさけび聲にしか聞かれないのであります。

農夫は汗にまみれ、泥によごれて働いてゐます。農夫たちは、みんなかうして働いてゐる。けれども私たちは、毎日かうしてなすこともなく過して行く。そのみでなく、私達は農夫が、かうして汗にまみれて作つてくれたものを、何の苦勞もしらずにたべてゐたのだ。農夫は可愛想だ。オ、その農夫の振りおろした一鍬ごとに幾らかの地中の虫が殺されて行く。何と惨めな有様よ、とかうお思ひになれますと、もう何を見る氣にもなれないのです。獨りで静かに考へ、そうして可愛想なものゝ爲めに泣いてやりたい。いゝえ泣いてやる丈では何にもならない。私は、その可愛想なものを救ふ方法を考へてやらう……とお考へつきになりました。

僧の組 親鸞聖人

今から凡そ七百四十年程前、藤原有範卿のお館に不思議なできごとがありました。それはたいへんお情けぶかい、そのころ都で評判の有範卿の奥方がお座敷にゐられた時のことです。その御座敷の障子へ、にわかには赫灼たる光がさして

「わしは如意輪といふものである。おんみはいつもわしを信心してくれるが、まだおんみには子供がないによつて男の子をさづけてあげやう」

かういふお聲が、金の鈴でもふるやうに、外のお庭の方から聞えます。未だ可愛い子供がなかつた奥方は夢かと許り驚いて障子をひらいて外を見ると紫の雲がたなびいて、その中に如意輪觀音さまのお姿がかうがうしく拜られました。と思ふうちにお姿は雲の中に消えて見えなくなりました。

このふしぎのあつた翌る年の四月一日奥方は玉のやうな男の子をもうけられました。お父様の有範卿のお喜びは非常なもので「松麿」と名をつけられました。

ところがこの松麿、まだ生れてやつと八月しかたゝないのにもう立つて歩きました。そうして初めて立つた時御佛壇の前へ歩いて行つて小さい紅葉の様な手を合せて佛様を拜んでゐたのには、みんなが大そう驚かされました。

又五つの春、お父様が御病氣になり大へん重くなつてお母様始めみんなの心配はいへんでした、松麿も心配の餘り梅の咲いてゐるお庭の土をこねつて佛様のお像をつくりそれを梅の枝にかざり、一心になつて

『み佛様、御佛様、どうぞお父様の御病氣を早くなほしてあげて下さい、なむあみだぶつ……』と熱心に御祈りしてゐました、このさまを見た人達はその孝行に、みな涙を流して感心しました。

九つのおときみどりの黒髪を落して松麿は出家しました、そうして一心に修業して終にあの名高い御念佛を擧げた親鸞聖人となりました。

第參章 五月 第三日曜日

説話 コロンブス

コロンブスはイタリーのゼノアで生れました。家はたいへん貧しい暮らしをしてゐましたが、小さい時から物事に熱心な性質でありました。そうして色々と研究して遂に地球が毬のやうに圓いものだと云ふことを發見しました。

其の當時では『地球がまるいものなら、人間なんかは皆んな滑りおちて終ふ筈じゃないか、馬鹿らしい』と言つて誰も眞に受ける者はありませんでした。

けれどもコロンブスは確信を持つてゐましたから一生懸命に宣傳してゐました。するとしまひにイサベラと申す女王様がお金や船を出してやりましたから、コロンブスは水夫と一しよに、西へ西へと航海したのです。

ところが、幾日行つても行つても、陸地らしいものは見えません。それで水夫達は腹をたて、遂にはコロンブスを殺して自分たちだけになつて歸らうと幾度しかけたか知れませんが何時もコロンブスの堅い決心に皆んなはよう手出しをしなかつたのです。遂にコロンブスの一心は達して幾日かの後にかのアメリカ大陸を發見すること

が出来ました。

今日のあの世界の富を集めた立派な國は、このコロンブスの堅い決心と、熱心から生れてきたものであります。

佛法僧合級 藤見遠足

佛僧法各組の生徒を引率して附近の藤見旁近郊の風光に接せしめ實地實物につき佛敎信者としての見解批判をして何物を見るにつけても佛陀の大慈悲心と關聯して考へ得るやう宇宙の廣大、佛慈の偉大なることを知らしめます。

何るべく寺院の藤を見に行く方が教育上よろしい。

第四章 五月 第四日曜日

説話 海軍記念日

日本海の大海戦は日露戦争中、最も大切な戦争でした。有名な強いバルチック艦隊は三十八隻といふたくさんな軍艦で日本海を通つて、浦鹽へ行かうとしました。早くも是を見つけた我が聯合艦隊は、こゝに敵艦をくひ止めて、激しい大海戦を開きました。時の司令長官東郷大將はその旗艦三笠のマストに、『皇國の興廢は此一戦にあり、各員一層奮勵努力せよ』と云ふ信號をかゝげました。

我艦隊の全員が一生懸命國を思ふの誠心を捧げて戦ひましたから、遂に二日に亘る海戦に敵艦隊を一隻残さず敗つて大勝利をえました。それは、明治三十八年五月二十七日のことです。

この芽出たい勝戦をお祝ひする今日を海軍記念日と申します。

佛法合級 三つの立派な御殿

太子の心を引立てるにはどうすれば良いかと、大王様は夜の目もねずに御心配になりました。

いろいろとお考へになつた末、三時殿と云ふ立派な御殿を太子のために造られました。三時殿と云ふのは、春、夏、秋それだけの時候に適した充分の設備をととのへた三つの御殿です。目をおどろかす許りの美しいこの三つの御殿には、それごとく世の中にありとあらゆる美しいものや、楽しいものが集められました。太子様のまわりはこの様なたのしみと満ち満ちてゐます。ほんとうに是程立派な楽しい住居が、何處の世に、またとありませうか。

果して太子様は御愉快だつたでせうか。

いえ、いえ、決して之んな事柄で、世の中の苦しんでゐる人を救つてやらうと思つた御決心をお忘れになる様な、太子様では御ざいけません。

なるほど、三時殿の出来上つたその當時は珍らしくもあり、又大王様の御心づくしを思つて御喜びになりました。けれども間もなく、世の中を救つてやらねばならぬと云ふ堅い御決心が、頭をもたげて來ました。

日中にはなやかな楽しさも、夜あたりの寝沈まつた頃の淋しさ物足りなさを感じては、あの美しいバラの花の蔭にも痛々しい刺がかくれてゐる様に、楽しみの裏にも絶えがたい悲哀が潜んでゐることを、御發見になります。

「私は大王様の御心づくしで、こんなに贅澤に、大せいの家來にかしづかれて、何もしないで暮してゐるが、私がかうしてゐる間も、先日の農夫たちは、汗を流して、泥まみれになつて働いてゐるであらう。

あの廣々とした野原で労働をしながら、獨りで考へごとをして見たい。今のこのうはべな歡樂から早く去つて、自由に世の中の大きな道を究めたい。そうして私はあはれな人々を罪から、苦しみから救つてやらねばならぬ、——世の中を救ふべく生れてきた私だ。私 が人々を救ふ道を考へる静かな場所は、何處にあるのであらう。早く

静かな處が望ましい』

太子様の世の中に苦しみなやんでゐる人々を救ふと云ふお考へは、石のやうに堅いのです。

それからは、まわりが樂しければ樂しい程、太子様はさみしさが泉のやうにわき出て来て、深いものおもひに沈ませられ、面白からぬ日を送つてゐられます。

かくして大王様のお心づくしの三時殿も、太子様の御心を引立てるには、少しも役立たず、返つて尙ほも深いものおもひに導いたのでありました。

僧の組 飲めない水

御佛様は日頃御弟子達の虚言を云つたり、人様の悪口を言つたり我儘をすることを御誠にになりました。

御弟子の中に羅雲と云ふ坊さんがゐました。この坊さんは心があら／＼しく時々虚言をついたり又人の悪口を言つたりすることがありました。御佛様はこんなことで他

の御弟子達から羅雲が嫌はれてゐるので可愛想に御思ひになり、或日羅雲に

『私は足が汚れてゐるから濁ぐ水を持つて来てはくれないか』と仰せられました。

羅雲は仰に従ひ盥に水を入れて御佛様の御前に持つて来て、御脚を洗つて進せました。

美しく澄んでゐた水も泥の爲に濁つて汚くなりました。御佛様は此の盥の水を指し

て、『羅雲よ、此の盥の水は飲めようか』と御問ひになりました。羅雲は

『此の水も元は立派な清水でありましたが、かう濁つてはとても飲むことは出来ませんと申上りました。そこで御佛様は威儀を改めて『羅雲よ、さらばよく聴け、お前は尊い王家に生れながら其の樂しみを追はず塵芥の様に捨て、尊い道に入つて僧となつた。お前は此の立派な始めの心懸は忘れて専ら虚言をつき、いろ／＼の汚い念が心の中に充ち満ちて居るので今のお前は此の濁水が再び用に立たぬと同じことである』とお誠にになり其の濁水をお捨てしめになり更に『此の盥には食物を入れる事が出来るか』と仰せられました。羅雲は汚い盥のことですから』とうてい食物を盛るこ

とは出来ません』とお答へしました。御釋迦様は「羅雲よ、折角出家はしたものの心
に誠なく強情我慢なお前は人から悪名を受けた。丁度お前はこの食物を入れられぬ汚
れた盥の様なものだ。又この様な汚い盥の壊れるのを惜しまないと同様に今若しお前
が死んでも佛様方はお前を惜んでは下さるまい。絶えず自分を顧て立派な悟を開か
ねばならない』と仰せられました。

第五章 五月 第五日曜日

説話 曾我夜討

曾我兄弟の父は河津三郎祐泰と云ふ人でした。祐泰は故あつて工藤祐經の爲めに殺
されました。丁度それは十郎が五才、五郎が二才の時でした。段々兄弟が大きくなつ
てから、お母様や、その他の者から『敵は工藤祐經だよ、成人したら必ずお父様の敵
討をせねばならない』と常に聞かされてゐました。

建久四年五月二十八日、宵の小雨は、夜に入つてだんぐり烈しく降つてきました。
其の夜、富士の裾野に源頼朝初め、曾我兄弟の敵工藤祐經が、晝の卷狩のつかれでね
てゐるのです。

五郎と十郎は今宵の機會を利用せではまたと其の機はあるまじと、充分用意をして
出かけました。二人は雑兵に化けて祐經の寢所に忍びよりました。

祐經も克く闘ひましたが、二人の親の仇を報いようとする誠心の刃の爲めに、遂に
斬り倒されました。

十八年間父の敵を討つ爲めにつぶさに、辛酸をなめた二人の願望は遂に成就するこ

とが出来ました。二人の喜びはどんなであつたでせう。

折から捕手の者が多勢駆けこんで来ました。二人は最早や敵を討つた以上、他の者に傷をつけるのが本意ではありません。で十郎は仁田四郎忠常に討たれ、五郎は捕へられて、頼朝の前へ引き出されました。五郎は兄祐成と一しよに葬つて下さいと云つて切腹してはてました。

たらちねはかくあれかしとそだてけん

つゆけき野邊の土となる身を

と言ふ歌は十郎祐成が家を出る時に詠んだものです。

一富士、二鷹、三茄子と言つて昔から敵討の第一位として後の人から讃へられてゐる有名な話です。今曾我兄弟を祠つた曾我八幡と云ふお社が白糸村に残つてゐます。

佛の組 忠 孝

我共が、かうして楽しく月日を過し、御教を聞く事の出来るのは、四恩即ち君主の恩、父母の恩、社會の恩、天地の恩(三寶の恩)があるからであります。

この四つの恩をつゞめると佛恩です。この佛恩に感じて報謝することを報恩の行と

言ひます。

父母に對する報恩、之れを孝と言ひ、君に對する報恩、之れを忠と言ひます。忠と孝、この二つが完全に行ふことが出来て始めて、佛心に契ふのであります。佛恩に報ゆることが、出来るのであります。

忠孝は實に我が國民道德の根本であります。我々の寸刻も忘れてはならぬ恩であります。

然しながら、私共は一人一人境遇が違ひます。遠く家を離れて行くものもあれば一生父母の膝下に暮らす者もあります。又君に仕へるにも、文武の別があります。又側近く侍するものもあれば、海山を隔て、役をつとめる者もありません。

けれども孝をつくし、忠をいたす誠には、決して別はありません。みんな等しく感謝、報恩の至情に發して、その行に適へばよいのです。

實に忠と孝とは一本であります。それですから、父母に事へて孝であれば、それは取りもなほさず君に仕へて忠であります。君に仕へて忠であれば、即ち父母に事へて

孝であります。

松雲禪師様の御母様は老後他に手頼る者もなくなり、禪師一人が杖柱となりました。そこで禪師はお母様を引取り御孝養をつくしました。御母様はお魚が大好物であり又音曲に大そう趣味を持つてゐましたから、禪師は屢々自分でお魚を買つてきてはお母様を喜ばし、音曲の師匠をよんで来てはお母様の楽しい嬉しそうな笑顔をみては喜びとしてゐました。

ところが、さすがのお母様も、この禪師の誠心からなる孝心に感じ、若しやこんな風にまでしてくれて却つて折角の禪師の名聲を、傷けてはならないと思ひ立ち、遂にそれから佛道にはいり、熱心に御精進をなさいました。禪師の如きは實に孝を全うした人と云ふべきであります。

私どもは常に、御佛様の御子であると云ふことを忘れず、先聖の慈訓を守り、忠孝の道を誤らない様につとめねばなりません。

通秀禪師「二親ニ孝ナレバ佛心ニ契フ。」

法の組 太子様の御結婚と四門御出遊

大王様は定めし太子が三時殿に面白く遊ぶ事と、折角立派に御造らしになられました。たが、その結果は、またあべこべに、却つて太子をも思ひに沈ませて行くのを御覽になつた太王様は、一體どうすれば良いのかと、がっかりとなさいました。

けれども——あく迄も出家する心を止めて、全印度の大王となつて欲しいと堅く心にきめてゐられる太王様は、また御家來方と御相談の上、新しい趣向を考へ出されました。それは、物質的なものでは、到底太子の御心を慰めることは出来ないから今度は、恩愛のきすなで、太子をお慰めし、喜ばしくしようと御決心になりました。そこで太子のために非常に盛んなお嫁ゑらびの會をお聞きになり、其の結果ヤシヨダラー姫が大せいのの中から、選ばれました。ヤシヨダラー姫は太子の従妹に當る方で、顔は月の様に美しく、心は蓮の花の様に清らかです。

いよく盛大な儀式がいとなまれて、太子様は遂に妻ある御身の上となられました。

これは太子様の十九才の御時でありました。

大王様の御慈愛、ヤシヨダラー姫の優しさは太子様をどれ丈御慰めする事が出来たか知れませんが、けれども太子は矢張り暇さへあれば、静かに考へられるのが、何よりだつたのです。

或日大王様は、城外の、はれぐしい天地を御覧になつたなれば、少しは太子の御気分も樂しげになる事であらうと、城外へ遊びに出る様に御すゝめになりました。

太子様は美しい馬車に召して東門から御出ましになりました。

すると、そこへ一人の年老つたヨボ〜のお爺さんが、腰をかゝめ、杖にすがつて歩いて來ました。太子様は之を御覧になつて、

「あれは何者か」とお側の者にお尋ねになりました。

「あれが年寄りで御座います。若い私共も遠からずあんなになる時が参りませう」とお答へいたしました。

「あゝ私 もまた、あんな年寄りになるのか。左様だ、今のうちに早く道を聞いて悟

りを開かねば、老ひて後悔するとも及ばない。こんなにのんきに遊んでは居られない城に歸らう。」と仰せになり、直ちにお城へお歸りになりました。

その後太子様は、再び大王様にすゝめられて、今度は南門からお出かけになりました。すると、そこに一人の哀れな病人が顔色蒼ざめ、肉おちて、うめき聲も絶え〜に倒れてゐました。太子は御者に

「あれはいかなるものか」と、たずねられました。

「あれは人に物を乞ひをして生きて行く哀れな乞食が、病の爲めに苦しんでゐるので御座います」と御者はお答へいたしました。

「おゝ、あれが病氣になやむ者の哀れな姿か、一度人として生れて來た者は、あの病にあつて苦しまねばならぬ事もあるのだ。嘸かし苦しいことであらう。」

御思ひやりの御深い太子様は病人の哀れな姿を見ては、もう自分だけが、樂しげに遊ぶと云ふ御心持が起りません。哀れな老人、この苦しげになやむ病人の事を考へると、やるせない思ひがさしてきて、直ぐに城へおかへりになりました。

僧の組 ビンヅル尊者

ピンヅル尊者様は印度の立派な御家に生まれまして、大變賢い御方でした。御釋迦様の御弟子になつて立派な修養をなさいましたが、ふとしたことから一生涯堂の中では御釋迦様の御話を聴くことが出来ず常に縁の上で聞いてゐたのでした。それで今でもあちらこちらの御寺の縁の上で暑い日も寒い日も辛抱してゐられるので。

それは或日のこと其の町の大金持の息子が長い／＼竿の先に黄金の馬をつけて「誰れでも取つた者にやる」と町の大通りで言ふてゐます。誰も取ることが出来ないので多勢で人垣を作つて只だ見てゐる丈でした。この時バラ門の男が「俺が取つてやらう」と前に出ました。これ迄黙つて側の大きな石の上になつたピンヅル尊者様は之を見て「他の者なら兎も角もバラモンなどに取らせては佛敎の恥だ」と忽ち習ひ覺えた大神通力を出しました。すると不思議や一丈餘りもある石はフワリ／＼とピンヅル尊者様を乗せて上に上りました。尊者はこんな大昔に石の飛行機を發明されたのです。この石

の飛行機は遂に黄金の馬をとりこの町を一周しました。見事に成功して長者からは丁重な御馳走がありました。町の上を飛んでゐる時、町の人々は若しや石が落ちればすまいかと逃げ廻りました。其の時御腹の大きな婦人が逃げ迷ひ誤つて川の中に落ち込んで溺れ死にました。

御釋迦様はこの石の飛行機のことを御聞きになり非常に御立腹でピンヅル尊者を御召しになつて「何でもない時に自分の力を自慢氣に人前で現すのは佛の敎を守る者のすべき事ではない。殊にお前は神通を現はした許りに御腹の大きな一人の婦人の命を絶つた。されば今から後はお前は私の敎を皆と聞くことはならぬ」と御叱りになりました。

それから後は縁の上で御話を聞いてゐました。それですから今でもお寺の中へ這入られず、寺の軒の下で雨の日も風の日も居られるのです。

第參篇 六月の分

第壹章 六月 第一日曜日

説話 米艦渡來

浦賀の濱の獵師が『黒船がやつて來たッ』と言つて大騒ぎをしたのは、今から六十年程前の嘉永六年の六月三日のことでした。男も女も年寄も小兒もみんな珍らしがつてわれ一と濱へ出て見ると、沖には浮城のやうな大きい船が、眞つ黒の煙を吐いて、すらつと四隻も列んでゐました。そのうちに變てこな小船に大男が乗つて、鐵砲や劔を持つて、どや／＼と濱へ上つて來ました。氣の弱い女は逃げ出し、小兒は鬼だと言つて泣きだし、それは／＼大變な騒ぎでした。これは米國から、始めて我國へ通商貿易をしようと言つて、ペルリといふ人がやつて來たのです。

この時分に軍艦のことを鐵張の蒸氣船だなんて云つたそうです。このことがあつて後、我國は外國と、だん／＼交通し出して、ほんのしばらくの間に、今日のやうな文明國になつたのです。

佛の組 聖徳太子

欽明天皇の十三年、百濟から佛像並に經論を獻して來たので、天皇は群臣に諮り給ふた處蘇我稻目は之を信すべしと言ひ、物部、中臣兩氏は國神の怒を招かんとて反對いたしました。そこで天皇は佛像並に經論を稻目に賜ひて、私かに歸仰することを聽し給ひました。と云ふ事は既に御話いたしました。

天皇の第四王子用明天皇も亦深く佛法に歸依し給ひ、その妃と共に佛前に祈願遊ばされ、敏達天皇の元年に第二王子を擧げさせられました。この方こそ厩戸豐聰耳皇子即ち我が聖徳太子でございます。

太子は生れながらにして、その感化を受け給ふたものでせう、二歳で南無佛と唱へ六歳で經を誦んじ、十六歳の春には公けに佛法を宮中に拜請して、父天皇の御惱平癒の祈願を遊ばされ、その秋には物部氏の亂に遭ひ、四天皇の像を刻んで、守護を祈念し給ひ、遂に排佛の徒を一掃して、佛法興隆の端緒を開かせ給ひました。

太子は二十二才の御時、推古天皇の皇太子となり、攝政の職に任じられ、その職に在すこと實に二十八年、或は位階を制定して門閥を打破し、憲法を發布しては政教を宣明し、或は租税を免して窮民を撫め、禁制を發して鳥獸を憐み、又新羅を伐つて國威を示し、隨に使節を送つては文物を採り内治に外交に、未曾有の隆昌を致させ給ひました。

太子が政治的施設の雄偉なることは、その比すべきものゝない程で、識者の常に驚歎する處であります。そうして其の大施設を全うし給ふた所の所以は、實に太子が佛教的精神の體驗に因るものが多いのであります。太子は常に佛教的精神を主として凡てを施設遊される事を御忘れになりません。即ち攝政第二年には大詔を御發しになり「三寶を興隆すべし」と宣ひ、第十二年には憲法を制定遊ばされ、その第二條に、「篤く三寶を敬へ、三寶は佛法僧なり、即ち四生の終歸にして萬國の極宗なり。何れの世、何れの人か、是の法をば貴ばざらん。」と誨へ給ふ。一期四十九年殆んど寧日なく、造寺、度僧、講經、寫經、乃至散華、供養の爲め力を盡させ給ひました。

そのものし給ふ法華、維摩、勝鬘の三經の疏は大乗佛教の津梁でありまして、太子の御信念の程をうかがひ奉るに充分なる典籍であります。

先徳の太子を尊崇して日本佛教の祖と申上げ、史家もまた治績を歎じて明治大帝に比してゐます。詢に故ありと申すべきであります。

法の組 氣高い出家の姿

東門で老ひ衰へた老人を見、南門で又可愛な病人を見て、人の身の弱さを淋しく思はれた太子様は、暫らくは御外遊もなさらず、日々に深い物思ひに沈み、之等のはかなさをない様にしたいものだと思つとめになりました。

然しながら大王様や家來達は心配をいたしました。そうして太子様の御心を晴ればれとする爲めには、矢張り城から出て城外の廣々とした、自然の大きな景色を御見せ申すより外ないと云ふ事になりました。

そこで今度は、西の門からお出かけになりました。前々の様な見苦しい事のあつては

ならないと充分にお達しを出してあつたのですが、丁度またお葬式に出會ひました。

太子様は今迄に見た事もない行列で、而かもその行列の人々は皆んな涙を流して泣き悲しんでゐます。不思議にお思ひになつて、

『あの行列は一體なにか』と臣下の者に御聞きになりました。

『あれは、人の死んだのを、お葬ひするのです』とお答へしました。

『あゝ、一度生れたものは必ず死なねばならない。之の時が人生の終りだ。その人生にお去らばを告げねばならぬ時が、何時、何處で来るかも知れない。永久の生命を保つことの出来ない我々は、如何なる立派な仕事をしかけてゐても、死がせまつて來れば打ちやつて死の旅につかねばならない。この時は何程偉大な人の力でもどうすることも出来ない。左様だ！私にはこんな徒らに時間を費してはならない。私は大きな仕事を完成せねばならないのだ。歸らう。』

と、いそいで御殿へお歸りになりました。

幾日か経つた後、こんどは北の門から御出ましになりました。ふと太子様の御目に

とまつたのは一人の清僧であります。手には鉢を持ち、身には粗末な法服をつけてはゐますが、安らげき温容と、氣高かく、身輕げな姿を、太子様は何かしらなつかしく思はれました。

お側の者に聞くと『出家で御座います。』とお答へ申上りました。

『眞の道を求める爲めに、懐かしい家と、可愛い妻子を残して、人里遠く離れた荒鷲棲む山に、晝尙ほ暗く毒蛇蠢く森林に、凡ての愛慾から離れて、清き生活をしつゝ修業する出家とは、あの様な人か。』

實際、世の中に惱み苦しむ人を救ふ爲めの道を究むるには、凡ての慾から、人から家から離れて、心ゆくまゝに充分、靜かに考へる事の出来る出家にならねばなるまい出家だ！出家して私は道を究めやう。

太子様は飾り氣のない、自由な、身輕なそうして氣高い出家の影を飽かず見つめて、堅く／＼出家する心になりました。

おめぐみ深い大王様の三時殿と、四つの門からの出遊びは共に、太子様に、やがて

御佛様となる大へん良い手引きとなつたのであります。

僧の組 觀音様を信じてゐた少女

或お金持の家へ年若い娘様が新しくお女中に來ました。新しい女中様は來て間がない爲めに古くからゐる女中達から馬鹿にされてゐました。或日新しいお女中は御主人の用で夕方御使ひに出て行きました。

いたづら好きの他の女中達は一つ嚇かしてやらうと門の柳の木の下で髪ふり亂し白衣着物を着て幽霊役となつて一人が佇むことにしました。新しい女中はそんなこととは知らず日が暮れて薄暗い中を歸つて來ると、門際の柳の木の下に何か怪しいものが立つてゐました。大概の女なら定めし吃驚して氣絶したことでせう。處か此女中はビクともせず歸つて御主人に御用から歸りましたと立派に答へました。顔色一つ變つてゐないので他の女中が不思議に思つて『門前の柳の木に怪物が出ると云ふ噂ですが、變つた事はありませんか』と聞くと『白い着物を着た女が髪を亂して柳の木の下に立つ

てゐた丈です。』と平氣で申しますから、『恐ろしいとは思ひませんでしたか』と重ねて問ふと新參の女中は言葉を改めて、『實は私が當家へ上る時母が此觀音様のお守と北野の天神様を常に肌身離すなと此守袋に納めて下さいました。若し世の中に實際怪物があるならば、矢張り觀音様も在すに違ひありません。それでたとへ怪物が出て來ても必ず觀音様が御護り下さる事と堅く信じてゐます。ですから何も恐いことはありません、私はたへず御佛様を信じて此のお守りを肌身につけてゐますから何時何處へ行くのでも女心して行けます。』とキツパリと申しましたので他の女中達は大層感心していたづらを謝りました。

皆さん、若し此の女中が御佛様を信じてゐなかつたなれば屹且大きな聲を上げるか氣絶したでせう。それに少しも恐れなかつたのは全く御佛様を信じてゐた御蔭であります。(兒童法話第七篇から)

第貳章 六月 第二日曜日

説話 徳川光圀

徳川光圀公は徳川頼房公のお子様であります。まだ光圀公が千代松君と言つて居られました時のある晩、お父様の頼房公は、千代松の膽玉を試さうと思つて、

『お前は、これから櫻馬場へ行つて、今日斬られた罪人の首を取つて來い』と仰ひました。千代松は、かしこまりましたと言つて、平氣で出かけました。その晩は、とりわけ氣味の悪い暗夜で刑場には血腥い風が、ぞう／＼と吹いてゐました。

千代松は、そんなことにはちつとも頓着しないで、手さぐりで罪人の首をさがし出しました。さうして持つて歸らうとするとその首が重くて／＼どうすることも出来ません。仕方がないので千代松は、その罪人の髻髪を引ッ掴んで、引ずり／＼お父様の前へ持つて歸りました。

お父様は、千代松の大膽なのに吃驚して、大切にしておいでになつた脇指を御褒美におあたへになりました。

頼房公が亡くなつてから光圀公はお父様のあとを繼いで水戸の城主となられました。或時、藩の若侍達が、廣場で武藝の稽古をしてすつかり疲れもたのですから、そのま

ゝごろゝ寝ころんでしまひました。

すると、そこへ盜賊がやつて来て、みんなの指してゐる刀を殘らず竊んで行きました少時して、若さむらひ共は、目を醒しますと、武士の魂とも云はれる刀がありません。魂を盗まれるなんて、武士として、どんなに恥だかわかりませせん。みんなは青くなつて、切腹の覺悟で光圀公の前へお詫びに出ました。すると公はにつこり笑つて『過つて改むるに憚ること勿れぢや、これからはねむければ家で寝るがよい』と云つて若侍の罪をお免しになりました。

今神戸の中心地とも云ふ位置にある湊川神社即ち楠公のお墓はこの頃大そう荒れはてゝゐりました。それは皆様も御承知のやうに楠公は勤王の心から足利將軍をいく度となく惱ました人ですから、徳川將軍からも好かれては居ませんでした。光圀公は大へんこれを歎いて、佐々宗淳といふ人を攝津へやつて、河内、攝津、和泉の三國の石を集めて立派な石碑を立てられました。その碑文に『嗚呼忠臣楠子之墓』と書かれてゐますがその文字は光圀公が自らお書きになつたのです。

佛の組 大菩薩行基

佛教の傳來してより百五十年、未だ朝廷の佛教に歸依する熱誠の臣民の間に了解の出來ないで、時として一部の國粹論者からは排斥せらるゝの時代にあつた時、四方に周行して廣く教化を布いて、日本と佛教との調和を謀つた者は實に行基菩薩であります。

行基菩薩は泉州の人でありまして、天智天皇の七年に生れ、その生れた時胎衣を纏つてゐましたから、父母は不祥の兒であらうとて樹上に棄て置きました。するとやがてのことに胎衣を脱けて、よく言ひましたので再び收めて養ひました。十五才で出家して、二十四才の時、高官寺の徳光法師に就て具足戒を受け、道照和尚に師事して常に山林中で禪定をし道照の滅後菩薩三十七才の時故山に歸り、自宅を改めて佛閣とし、亡父の追善を營み、又自ら炊爨して母を養ひ美しい篤行を現はされました。

母の歿後、郷里を後に畿内、北陸、東海等の諸州を周遊して、橋を架け、堤を築き

船を置き、井を掘り大いに公益を廣め、そうして巧に三寶の徳を讀へて佛法を弘通いたしました。菩薩はかくして道譽日に高くなり、其の徳を慕ふもの愈多く、其の往くや追隨するもの千百の多きに達し、其の止まるや參集して市をなしたと申します。處が猥りに法筵を開き私かに僧尼を度し、恣まに行乞することは、當時の禁制でありましたから、養元元年元正天皇は、

『方今小僧行基及弟子等妄りに罪福を説き朋黨を構へて、道俗を擾亂し、釋教に違ひ法令に背く。村里に布告して嚴に禁斷を行ふべし。』

と勅令遊ばされました。こゝに於て行基は拘禁の厄に遭ひました。時に齡五十。

けれども、菩薩は僅かに僧尼を私度したと云ふ事以外に何等の罪として問はるべきものがありませんでした、而かも既に御話し致しました通り、橋を架け、路を修めて公益を進めて社會に貢献する所が甚だ大であることを漸く認められ、遂に度僧の恩命を拜しました。そうして寺史乙磨の寄進を得て菅原寺を建立いたしました。ついで聖武天皇御即位遊ばされてよりは殊に重用せられ、自ら奏して諸國に國分寺創設の議を

決行せしめ、又東大寺新建に關しても偉大なる努力を盡したのであります。殊に聖武天皇の御大願たるロシヤナ佛鑄造の如きは、その當時にあつては、殆んど夢想されな程の大事業でありました、が、菩薩は七十六才の高齡を以て克く多くの弟子と協力して、全國にその功德を説き、淨財を募つて、大いにこの大事業を翼賛し奉りました。

天平十七年、日本最初の大僧正に任せられ、二十一年天皇、后皇、皇太后の戒師となつて大菩薩號を勅賜され、翌二月入寂遊ばしました。

一期八十二年の行化は誠に當時の人々の文殊菩薩の化身として尊信して來た事にかない偉大なものではありませんか。

法の組 御出家

さて太子様は出家して御修業しようと思つて決心をしてみられると、後に残つた父大王様が御年を召されて御世繼もなくして如何ばかり御なげき遊ばすであらうか、と考へると折角のこの決心にもぶり勝でありました。

殊に此當時の印度の習慣として、如何に哲學や宗教の修業をする爲めに家を捨てる志があつても、老いて働かなくなると、若くは子供を育て、家を繼がしてからでない場合は、勝手に出家する譯には行かないのでありました。

それで、心に清い修業を希はれてゐる太子様も、空しくも、心なき十年の宮廷生活を御結婚してから送られました。

所がその十年目即ち太子様二十九才の御時、御妃ヤシヨダラー姫はラゴラと申す玉の様な王子をもうけられました。

大王様始め御殿の臣下達も野に耕してゐる農夫たち迄もこの御目出度を慶びました。

勿論太子様も大變に喜ばれました。けれども太子様のお喜びになつた理由の重要なものは出家が出来た様になつたからであります。

今や太子様が出来なかつてもラゴラ王子と云ふ世繼が出来たから、もう父大王様に對する幾分のお申譯も出来ると言ふものと御考へになり、少しも早く、王者の生活から離れて、全くの一修業者となつて、あらゆる仙人や哲學者に道を聞き、教へを受けやうと愈々御決心になりました。そうして、其の折の來ることを、ひそかにうかつてゐられました。

時しも十月一日、晝間のにぎやかな歌舞音曲も全く静まつて、さしものカピラエ城も夜更けては死んだ様な静けさであります。

悉多太子は今宵こそ出家しようと思つて御殿の様子を御注意になりました。すると皆んな深い眠りに安らかな夢を結んでゐる様であります。殊に太子の御心を引立たせる爲めに音楽に舞踊に踏りくるつた花と見まがう許りの美女等も、醜い姿をして臥してゐます『世の中の凡ての美しいものは、皆な之の様なものか、——あらゆる息穢も只だ草薺

もて包んでゐるに過ぎない」とこゝでも亦深く厭はしい念いが起つて、愈々出家の念が止み難く、遂に座を起ち御氣に入りの御者シヤノクを御呼びになりました。

「夜かく更けてから何方で御座います。」

おゝ太子様！ いかなればお自身で、かゝる賤しき所へ？」シヤノクは不審に思つて尋ねた。

太子様は「出家するのだ、余の愛馬に鞍を置け」と御命じになりました。

驚いたシヤノクは、いろくくに御諫め申上げましたが、主人の嚴命否みかねて、太子様の愛馬カンダカを厩から引き出しました。

カンダカに召した太子様は可愛いラゴラ王子、懐かしい大王様、優しいヤシヨダラ姫につきぬ御名残りも遊ばされず、後髪を引かれる思ひで城を後にして遂に世尊と仰がるゝ第一歩に旅立たれました。之は御年二十九才の時でありました。

僧の組 弘法大師さま

弘法大師さまは讃岐の屏風浦にお生れになりました。非常に賢いので神童と言はれてゐました。

幼い時は眞魚と云ふお名前でありましたが、或日のこと眞魚が大勢の友達と佛様のお像をこしらえて一心に拜んでゐた時、丁度たくさんの家來をつれた殿様のお使の按察使が通りかゝつて眞魚の姿を見て、あはてゝ馬から飛降りて丁寧にお辭儀をしました。家來が不思議に思つて聞くと

「このお子さんのうしろには、佛様が五つの傘をさゝげてゐられる。後にはきつと佛様のやうに貴い方になるお子様にちがひない」と答へて家來にもお辭儀をさせました。氏神様に行つても馬の上から拜む彼が、眞魚の前ではわざゝ馬から降りてお辭儀をしたので村中の評判になりました。そうしてそれからは眞魚と云ふ者がなくなつて貴物くゝと尊ぶ様になりました。

貴物は學問が大好きで一度教つたら、どんなむづかしいことでも忘れないといふ子供でありました。貴物が十二才の時京都の伯父様が訪ねて参りました。貴物は伯父様に坊さまになりたいから京都へ伴つて歸つて下さいと御願ひしました、伯父様は驚いて、

『勉強がしたいなら坊さんにならないでも立派な先生になつたらよいではないか、坊さんになると云ふやうなことは立派な寶物を海の中へ棄てるやうなものではないか』と云つて訓されました。けれども貴物は熱心に『御兩親から私達の遠い祖先は弓矢をもつて人を従へてゐたと聞きました。しかし伯父様弓矢では人の心をほんとうに従はせることは出来ません。私は心から人を導くみ佛様の道をひろめたいと思ひます』と決心の次第をキツバリと物語りました。伯父様はこの心持にすつかり感心して京都へ伴つて歸りました。

或時は諸國修業をなされ或時は支那へ洋行したりして遂に眞言宗をお弘めになりました。

第參章 六月 第三日曜日

説話 七つの甕

昔一人のお爺さんがありました。

何よりも黄金が好きで、食ふものも食はずに働いて、もうけたお金を残らず黄金に換へて壺の中へ容れて置きました。

ながい年月の間には、黄金の一ぱいはいつた壺が七つも出来ました。

お爺様は、その壺を我が兒のやうに可愛がつて、

『もう、おまへは七つになつたんだね、まてまて、いまに十になつたら立派なお土藏を建てゝやるから、それまでは地べたの中て辛抱しておいで、いゝかい』
と言つて、地の中へ埋めて置きました。

そのうちに、お爺さんは、病氣で死にました。けれどもお爺様は黄金の壺のことが心配になつて、死んでも浮ばれません。たゞおいしいおいしいといふ執念がこりかたまつてとうとうお爺さんは蛇に生れかわりました。

幾年か經つてお爺さんの住んでゐた家は、すつかり毀れて野原になつてしまひまし

たお爺さんの蛇は壺を埋めて置いた處をぞろ／＼匍ひ歩いて番をしてをりました。

ある時蛇はつく／＼考へて見ると、なんだかつまらない氣がし出しました。

『何時までも／＼黄金の番としてゐても蛇であるから使へない又食べておいしいものでもない。こんなつまらないものを大切にいつまでも持つてゐても爲方がない、それよりこれをすつかりお寺へ呈げて、お経でも讀んで頂いた方がいくらいかわからない』と、こんな事を思つて蛇は、夜の明けのを待つてぞろ／＼路傍へ這ひ出しました。

そして丁度そこを通つた一人の人に

『もし／＼すこしお願ひがございます』

その人は毒蛇からよびとめられたので驚いて逃げ出さうとしましたがあまりまじめな様子なのでこわ／＼傍へ行きますと、蛇は、

『どうもすみませんそのお願ひといふのは、ほかのことではありませんが、私も實は、人間だつたのです。ところが生れつき何よりも金が好きで、一生けんめい金を集めました。そうして金は大きい壺に七はいも出来ましたので、私は地の中へ埋めて置きました。すると、急に私は死にました。けれども澤山な金をそのまゝにして置いたと思ふと、惜しくて／＼死ねません。それで私は、とう／＼蛇になりました。そして毎日金はいつてゐる壺を人にとられはすまいかと思つて番をしてをります。けれども考

へて見ると、何時まで經つたとて、私がそれを使へるものでもなし食へることも出来ません、只惜しい／＼といふ心が増すばかりです、それで一層のこと、お寺へあげてしまひたいと思つてゐます。それでまことに御手数ですが、その壺を掘り出してお寺へもつて行つて下さいませんでせうか。』と申しました。その人は可哀想に思つて蛇の云つた處を掘つて七つの金の壺をさがしその壺を蛇と一しよにお寺へ持つて行つて、その譯をお坊さんに話しました。

何しろ澤山の黄金ですから大勢のお坊さんにお供養をすることが出来ます。

お寺では、おごそかなお勤めが始まつて、大せいの坊さんは、かはる／＼蛇のところに遣つて来て、尊いみをしへを聴かせました。

蛇は心の底から嬉しい思をしてをりましたが、まもなく死んで忉利天といふたのしい楽しい天國へ生れることが出来ました。

佛の組 鑑眞和上の志氣

鑑眞和上は本邦律宗の第一祖でありまして又我國に戒律を布演したる律宗の偉人でもあります。唐の揚州に生れ、十四才の時父に従つて寺に詣で、佛像を拜して忽ち感ずる所がありました。遂に父に請ひ、智講禪師に就て沙彌となりました。其の後、道岸弘景の二律師に就いて戒律を學び、二十六才で始めて業は全く成りました。それより各地に教化して四十餘才の頃には戒名世に並びなく、その門下は甚だ盛んでありました。

日本の天平五年、わが榮叡、普照の二師、勅を奉じ律師を求めて入唐し諸方を周遊してゐましたが、偶々和上の揚州にある事を知り禮謁して、口を極め情を盡して東渡を懇請いたしました。和上は衆を集めて、日本の有縁の地であることをとき東行を謀りました。海路遙かに遠く途中難多く能く達するものは百に一二のみでありましたから、誰一人として受け難き身を挺してこの難に應じやうとするものはありません。

こゝに於て和上は奮然として告げました。『誰一人行くものはないか、よし我自身で行かう。苟も大法の爲めである、何んぞ身命を惜しむべきや。』と、乃ち船を求め、糧を蓄へ、上足祥彦以下二十一人の弟子を引具して海路につかうといはしました。處がその行くを妨げやうとして密かに官に訴へて、『海賊將に航行しようとして某寺にあり』と告げましたから、終に冤罪を被つて投獄せられ、その船は沒收されました。かくして和上の企ては破れて終つたのであります。時に天寶二年六月、和上まさに五十六才でありました。

和上の嫌疑は間もなくはれました。そこで憂ふる榮叡・普照二人を慰めて、船を買ひ舟師を雇つて、同年の十二月出航いたしました。漸く船が僅かに岸を離れた時、忽ち大暴風に過ひ激浪船を漂はし、潮水はこの大寒に腰を浸して寒氣は堪ふことが出来ません。かうして第二次の渡航も中止せねばなりませんでした。

けれども、和上は猶其志を屈することなく更に船を修理して順風を待つこと一ヶ月好風に乗じて發しましたが、船が桑名山にさしかゝつた時風急に逆風に變じて浪高く

遂に進路を失ひ、米水共に盡きて飢渴に苦しむこと三日、漸く他船に救はれ、わづかに蘇生いたしました。またしても渡航の企は挫折したのであります。

而も和上の志は挫折すれば挫折する毎にいよいよ堅く、意氣は少しも挫けません。四たび渡航の途につかうといたしました。けれども和上の東渡を喜ばない者の官に訴へたことによつて又々妨げられねばなりませんでした。

天寶七年、和上は幾度も一々の失敗に撓むことなく、其の意氣は正に天を衝くものがありまして、新に船を造り六月、新河を發しました。ところが運悪く今度も亦暴風の而かも三度暴風の襲來に遭ひ、風浪の間に漂ふこと二ヶ月、最早や船内食ふに物なく、たい僅かに残る生米を嚼み、飲料水がありませんから鹹水を掬してこれを飲むの有様であります。和上始め一同はこれが爲めに腹痛が起り、これ以上堪ふべきもありません。止むを得ず、また一航を停めねばなりませんでした。一度ならず二度ならず三度、四度も挫折して此處に於て第五次の渡航もまた失敗に了りました。

大悲の熱誠と護法の情火に催されて遠く本邦にまで戒律を弘め廣く佛種子を植ゑん

として、不撓不屈の大精神を以て計畫し實行に着手しては失敗すること實に前後五回或は人爲の厄に遭ひ或は天然の災に遇ひ、其の苦難は幾干か知れません。而かも終に目的は達せられない其の失望はいかばかりでせう。加ふるに和上は齡六十、其の間に日本から招きに來た榮毅師が入寂する等、久しい間の心身の勞苦に遂に眼疾を患ひ失明して、一世を風靡した硬骨の老律師も、今は憐むべき一盲僧となつて終ひました。天ははたしてこの壯途を見逃して了ふでせうか。

否々、和上の法運は未だ断えてはゐませんでした。天寶十二年、わが遣唐使藤原清河、副使大伴胡麿及吉備眞備等の唐に來つて、和上の聲譽を聞き直ちに往つて謁しました。和上は大いに悦び其の志を談つて、この年の十一月副使胡麿の船に乗つて、多くの佛像、經典を携へて、恙なく孝謙天皇の天平五年の冬薩摩に上陸しました。これと和上六十六才の時でありまして、その東渡を企つること前後六回、十有一年にして始めて其の宿願を達せられたのであります。

翌年六月京都に上りました。聖武天皇はこれを嘉し給ひ、「大徳和上、遠く滄波を涉

りて我が國に來る、誠に朕が意に副へり。自今以後、授戒傳律、大和上に一任す。」と詔して、天平勝寶六年、孝謙天皇皇太子と共に登壇受戒し給ひ、道俗また競つてその門に入り、律宗の建立がこゝに成つたのであります。誠に鑑眞和上の不屈不撓にして克くその志を遂げた事は古今無比の壯舉であります。

私共は常に和上の不屈不撓の大精神を學ばねばなりません。

法の組 森のわかれ

ひそかに城をぬけ出られた悉多太子は、闇の夜をカンダカに軽く鞭をあてつゝ東へくくと急がれました。

一旦御決心してのことではありますが、矢張り年老つた父大王様や可愛いラゴラ王子やヤシヨダラー姫の事を思ふと、何となく名残りが惜しまれるのでした。それは、御決心が堅ければ堅い程、其の情は強いのであります。

けれども大願を持つてゐると云ふ事を御感じになつては、自ら心を勵まされました。大よそ十七里許り來た時にラーマ城と云ふ町へ來ました。このラーマ城を過ぎるとアハミ河に參りました。この河の畔りに見渡す限りの大きな深林があります。こゝまで來た時に太子様は駒から下りて、靜かにシヤノクに仰せられました。

「シヤノクよ、余はこゝで髪を剃り、飾りを取除き、出家となつて修業を始める。此の上は苦心修業して目出度大覺の位に入る迄は斷じて再び歸らない。お前は髪や飾りを携へ馬をひいて王城に歸り、父大王始め家族の者に、この旨を傳へよ」

シヤノクは驚いて、
「今更御出家をお止め申しは致しませぬが、せめてはこのシヤノクを、何處へ迄も御伴れ下さいませ。」と申上げて、太子様が幾度か理を説き聽かしても容易に聞き譯けません。

そこで太子様は劍を抜いて御自分の頭髪を截り落し、寶冠や美服を脱ぎ、之等をシヤノクに御渡しになり、

「お前の心持は嬉しいが修業者に供はいらない。それよりか余の安否を御案じ下さつてゐる父大王様に、この由を傳へ、御安心願つてくれよ」と嚴かに命せられました。シヤノクは是非なくも形見の品を携へ馬を引いて、只管に太子様の御健康を祈つて泣く泣く歸途につきました。

太子様は、これからどんな御生活を遊ばされるのでせうか。

僧の組 欲深い愚人

或時死刑にせられる罪人が殺されるのがいやさに逃げました。其の頃印度では罪人が逃げたなればあの大きな象にふみころさせることになつてゐました。

逃げてゐた罪人は間もなく捕へられました。可愛そうにその罪人は廣い野原で象にふみ殺されることになり象と一しよに野原に伴れて行かれました。

その罪人が氣の狂つた強い象に追ひつかれそうになつた時ふと古井戸が眼につきました。罪人は大よろこびで其の傍から出てゐる木の根にすがつて古井戸の中へかく

れてあやふく恐ろしい象からのがれました。

やれ安心と思つた罪人が下を見ると底にはまた大きな毒蛇が大口を開いて罪人の落ちて來るのを待つてゐます。驚いた罪人は一生懸命に其の木の根につかまつてゐました。すると白い鼠と黒い鼠が出て來て罪人のつかまつてゐる木の根元をかちりだしました。

罪人の驚きはどんなであつたでせう。

處が傍にある美しい木から出る蜜が罪人の口の中にはいりました。そのおいしいこと！到底そのおいしさは忘れられません。罪人は大きな口を開いて待つてゐる恐ろしい毒蛇のことも命の綱とすかつてゐる木の根を鼠にかちられてゐることも忘れて、時々しか落ちて來ない蜜の味にひかされてこの恐ろしい穴から出ようともしませんでした。

わづかな蜜がほしいと云ふ慾のためにこの罪人は遂に毒蛇の餌食となつて大切な命をなくしてしまひました。(譬喩經)

第四章 六月 第四日曜日

説話 加藤清正

加藤清正といふと誰れでもすぐに朝鮮の虎退治に行つた大將だと云ふことでせう。豊臣秀吉が天下をとつた時に大へんよくはたらいた人も又朝鮮征伐に行つて、朝鮮の王子を二人も、捕虜にしたえらい大將もこの清正公であります。

それで朝鮮では、赤坊が泣き出すと、「それッ、清正が来たよ」と言ひます。するとどんなに泣いてゐても、すぐ泣き止むさうです。そんなに名高い鬼上官と言はれた清正の幼名は矢張り強さうな夜叉若とよばれてゐました。この人は生れた時から大それ強い兒だつたさうです。生れて三日目とかに、一人で椽側まで匍つて行つて、庭へコロ／＼と落ちたので、お母様は吃驚して、行つて見ますと、庭石で頭を打つつけてゐましたが、頭は破れないで石が二つに破れてゐたといふことです。

この清正は、大それ顔が長がかつたさうです。そこへあの様に長い兜を冠つてゐたでせう。だから馬に乗つてゐると、馬が圓い顔に見えたといふことです。清正は慶長十六年六月廿四日、年五十歳で死なれました。

佛の組 傳教大師

傳教大師は、生氣を失つてゐた奈良朝時代の佛敎を覺醒して、佛敎の新生氣を發揮した平安朝初期に於ける二大高僧の一人でありまして、名を最澄といひ、江州の滋賀に生れました。

十二才の時、大安寺の行表和上に就て出家いたしました。行表和上は當代に於ける有數の碩學で佛敎に對する造詣は殊に深い方でありましたから、唯識華嚴起信等を充分に學ぶことが出来たのであります。その後天台の學を修め十八才にして具足戒を受け、觀山に登つて其の靈域たることを認め、一庵を結んで専心修業につとめてゐましたが猶ほ天台の學に精通することが出来ないことを慨き、南都に轉じて鑑真和尚の齎したる天台の經釋を寫し得て非常に喜び、大いに學び遂に天台の學に於て悟る處がありました。

延暦四年、大師十九才の時、當時の僧侶の、自己の修行に努めず、たい貴族に媚ぶ

ることを以て無上の光榮としてゐる濁り穢れたる有様を見て、自分のみは世の穢れをのがれて深く山林に於てまことの道に入らうと、御決心になり、高く聚ゆる比叡の峯に登つて、一堂を設け、偏に佛院の冥護を祈りつゝ、日夜經釋を繕き深く坐禪觀念にふけられました。延暦七年に至つて自ら薬師如來の尊像を刻んで佛殿を營み、之を安置しました。これが根本中堂、後に一乘止觀院と稱したもので所謂比叡山寺と呼ぶものは是れであります。

延暦十三年十月、桓武天皇の都を平安に遷し給ふや、大師に命じて、王城守護の祈禱法會を、一乘止觀院に於て修せしめられ、天皇親ら山上に臨幸し給ひ、南都各宗の諸大徳も袖をつらねてその法會に參列いたしました。その壯觀、その盛大さは、人目を驚かすばかりでありました。しかも大師この時漸く二十八才の若僧であつたことを見ては、いかに大師が道業に精進せるかを知ることが出来るでせう。其後引續き天台一乗の妙旨を世に顯さんと、努力遊ばされ、或は南都の名僧を請して、法華十講の法會を開き、或は高尾山の法華會に臨みて天台の妙旨を説き述べる等、偉大なる活動

に依り、大師の名は一時に世に震ひ、勅額を賜ひ、内供奉禪師に補せられました。

然しながら、大師は猶修養の足らざるを思ひて、入唐の志を發し上表して、「台教の深旨、詳かにせざる所あり。師傳を承げざれば、未だ信を置き難し」といひ、延暦二十一年入唐の勅許を得て、同二十三年七月遣唐大師の一行と俱に筑紫を發して九年明州に達しました。時に大師三十八才。それより、台州天台山に行き、道邃・行滿の二大徳から天台の秘奥を傳授し、且つ道邃から菩薩の大戒を受けました。又別に禪林寺の儵然より禪學を學び、越州の順曉阿闍梨より眞言を相傳することを得たのであります。かくして唐にあること一年、天・密・禪・戒の四宗を傳へて、延暦二十四年七月、日本にお歸りになりました。

大師御歸朝後、天皇の勅に依り、南都の學匠に台教を傳へ、又大いに叡山の規模を擴張し、從來の諸宗の外に新に天台の一宗を加へしめ、専ら一人に一日の憂なく、國に萬年の慶あらしめん。と祈願遊ばしました。そうして叡山を南都僧綱の支配より離れしめ、且從來の小乘戒を捨て、別に大乘の戒壇を築かんものと奏請しました。す

ると南都の僧侶等の大反對が起つたのであります。そこで大師は『顯戒論』三卷を著し、血脈譜一卷を撰んで、弘仁十一年、更に上奏して、大乘戒壇の獨立を請ひ、翌年また『顯戒論緣起』二卷を作り、その弟子光定等を勵まして、『戒法の爲めには身命もまた惜しからず』と論じられました。然しながら未だ其のことの容れられない、弘仁十三年六月五十六才にて中道院に於て入寂されたのであります。

大師の訃天聽に達するや、天皇特にその初七日に戒壇建立を允許し給ひ、後清和天皇又勅して傳教大師と追諡遊ばされました。大師を以て大乘戒壇の元祖とし、大師號を贈られた最初といたします。

法の組 苦行の問答

太子様はシャノクに別れて、たゞ一人、森林の奥深く御進みになりました。この森林の中にはパールガヴァ（バツカとも呼ぶ）と云ふ名高い仙人が、大勢の弟子と共に苦行をしてゐました。それで太子様は、第一ばんにこのパールガヴァ仙人をお訪ねに

なりました。

行つて見ると、夢にも考へた事のない様な、意外なひどい苦行をしてゐます。

或者はイバラの上になたり、或者は水に入つてゐたり、或は焼付く様な太陽をみつめてゐたり、或は自分の毛髪を一本一本ぬきとり、或は一日中樹の枝に坐つてゐるものもあれば、又中には頭だけ出して身體をすつぽりと、土中に埋めてゐるものなど、それはいろいろな方法で、苦行をしてゐます。

之を御覽になつた太子様は、

『あなた方は、何のために、こんな苦行をするのですか。』と、パールガヴァ仙人に、お尋ねになりました。仙人は

『この世で、苦しい苦行をして置けば、來世ではその報いで幸福が得られるからである』と答へました。

これを聞いた太子様は、お考へになりました。そうして、

『成る程、悪いことには苦しい報があり、善いことには、楽しい報がある事は事實で

あらう。又此の世で身を苦しめた報として、來世で樂しみ榮えるといふ事にも間違ひは無いとする。そうすると、其の樂しい來世で耽つた樂しみの報は又、結局苦しみに來來世へ生れねばならぬといふ事になる。して見ると今の苦しい修業は、實に來々世の苦しみの世界へ生れて來る様に、種蒔をして居る様なものではないでせうか。』と質されました。

之の太子様の深いお考への御質問には、さすがの仙人もお答へが出来ませんでした。そこで太子様は、仙人に別れをつけて、更によき聖人に教を乞ふ爲めにマカダの方にお向ひになりました。

僧の組 悪口

或時のことでありました。或る愚な女が御佛様の御弟子であるのに、他所へ行つて御佛様の悪口を申しました。

御佛様はこのことをお聞きになりました。けれども少しも御氣を悪くせられませんでした。

でした。そうしていまだ修養の足りないかの女を可愛想にお思召しになつて、御訓しなさらうとしますと充分道理のわからないかの女は、尙御佛様の悪口を口ばしりました。そこで御佛様は愈おやさしく

『これ女よ、若し人が物を他人の所へ持つて行つて與らうと云ふても先方が受取らなかつたら、其物は結局誰のものになるか』と御たずねになりました。その女は

『申す迄もなくそれは與らうと言つて持つて行つた者のもので御座います』と御答へしたのです。

『そこだ、賢い女よ、それと同様に今お前は私に對して悪口を言つたが私は少しも貰はないから、あの悪口は一つ残らず持つて歸らねばなるまいぞ、悪い者が善い人を言ると云ふことは丁度天に向つて唾を吐きかけるやうなもので、唾は天へ達かずに却て吐いた者の面へ降つて來るのである』と御慈悲のこもつた御聲でおさとなりました。この有難い御教へを承つて此、愚な人も始めて耻かしいことをしたと思ひ、其の場で御佛様の御赦を御願ひし、遂に立派な御弟子となつたと申します。

第四篇 七月の分

第壹章 七月 第一日曜日

説話 螢

お話に作られた螢は可哀想に、大てい皆悪者ばかりでせう。そうら、お自慢螢とか盲目螢とか云はれてゐますね、なにも螢はそんな悪者ぢやありません。どうしたものがお尻に燈がついてゐるばかりに、大せいの蟲たちが楽しさうに、とび廻つてゐるのに、自分ばかりが、狭くらしい籠の中へ入れられて、食物と言つては何も貰へないしそれにまだ寝てゐる明るいうちから、腥ぐさい水をブツ／＼と吹きかけられて、いやでも燈をともしなければなりません。

それに螢のお話と云へばすぐ、螢が他の蟲達にお自慢をしたとか、自分の美しいのを他の蟲に見せびらかしたとかにきまつてゐるぢやありませんか。着物だつて、さうです、螢の着てゐるのは、ちつとも美しくはありません。玉蟲をござんなさい、黄金蟲をござんなさい。螢よりもすつと／＼美しいでせう。あのやかましい蟬でさへ、あんなに涼しさうな薄い着物を着てゐるのに、螢はゴツ／＼の眞つ黒なを着て、ほんの少し赤い襟をかけてゐるばかりです。

おまけに螢は悪口言ひだと云ふお話もありますね、まあ可哀想に……。螢はちつとも、ものを言はないぢやありませんか。あの名高い豊臣秀吉の歌に「奥山に紅葉ふみわけ鳴く螢」といふのがあるそうですが、螢の鳴いたのを聞いた人は一人もないでせう。

皆さん！短かい〜壽命をもつて生れて来たあの可哀さうな螢を、見附け次第に捕つて苛めたりなんかしないで、涼しい夏の空を思ふまゝに飛ばしておやんなさい。

佛の組 弘法大師

平安朝四百年間、よくその教勢を支持して日本佛教の中堅であつたものは、前日曜日に話した傳教大師の天台宗と弘法大師の眞言宗の二つであります。

弘法大師は、名を空海と云ひ、傳教大師に後ること七年讃岐の屏風浦に誕生遊ばされました。幼にして聰明なる大師は十二才より外典を學び、十八才の時、京都に上つて大學寮に入り、左氏春秋、毛詩、左傳等を研究し、かたわら、三論宗の勤操律師に就て佛學を學びました。學の進むにつれて佛學に興味を持ち遂に佛門に入らんと決心

をいたしました。父は愛するの餘り、忠孝に背くと説いて許しません。此處に於て大師は『三教指歸』三卷を著して、儒道佛の三道を論じ、釋李孔の三種の教綱に、淺深の隔てあるとも總て聖説である。若し一羅に入らば、何ぞ忠孝に背かんや、と説破しました。そうして漸く父の許しを得て、大師二十歳の時、泉州横尾山寺に於て勤操律師より沙彌戒を受けたのであります。

爾後、愈々廣く教經を讀誦し、専心道を求め、偶々大和久米寺に大毘盧遮那經を得て、層一層勉學しました。然しながらこの經文は理義高遠で、さすがの大師にも理解することが出来ません。終に入唐の心を發して、延暦二十三年、三十一才で入唐求法の勅許を得、同年七月使船に乗じ、同八月福州に上陸しました。

初め青龍寺の惠果阿闍梨に師事して、密教の秘法を相承し、修法の具をも授けられ且つ遍照金剛の號を受けました。阿闍梨の滅後長安の醴泉寺に般若三藏を訪ひ、梵語悉曇を學び、滯留すること凡そ二年、大同元年、數百部の書冊をもたらし遙かに歸朝しました。其の年は筑紫の觀音寺に寓し、翌二年勅を受けて、泉州の横尾山寺に轉

じ、大同三年高尾山寺に移つて、『仁王經』の大法を嚴修して、國家の安寧を祈禱したのであります。これより大師の德譽漸く四方に傳り、又諸大寺の諸德競うて來問して其の教を受け、遂に請じて東大寺の別當に迎へました。後屢々諸國を遍歴して、山を開き、地を掘り、寺を建て、法を修して人を度し、又醫術に長じたる大師は廣く病人をも救はれましたから、行く先々で生佛を以て待遇されました。

大師はもと深山を愛し、都塵を避けて幽靜なる地に道場を立てんものと、弘仁七年遊行して、高野の靈區を探り得、奏請して寺宇を造營いたしました。之を金剛峯寺と云ひ、大師御入定の地と定め給ふたのであります。

弘仁十四年、詔して東寺を大師に賜ひ、天長九年に至り號を賜ひて教王護國寺といひます。大師はよく講堂層塔を造營し、又請雨經法を修して靈驗がありました。

承和二年三月十日より實慧等の弟子數十人を金剛峯寺に集めて、側に侍して彌勒の法號を唱へさせ、十五日に二十五ヶ條の遺告を遊ばされ、二十一日蘭湯に汚を洗ひ、結跏趺坐して、同日寅の刻、泊然と入滅ばされました。世壽正に六十有二。

嵯峨上皇は大師の訃を聞き召して、深くも之を惜しみ給ひ、悼詩を賜りました。以て大師の如何に皇室に歸依せられたるやを知ることが出来ませう。

大師は學識共に高く、著書には『即身成佛義』『十住心論』『秘藏寶鑰』『顯密二教論』以下創作にかゝるもの、其他諸經の註疏、事相に關するものは殆んど枚擧に遑なき程であります。天長五年には、帝都に綜藝種智院を創設して、貧賤の子弟をも教養して廣く人材を養成するの道を開き、所謂今日の英才教育をこの時代既に實行遊ばされました。

大師の滅後六十八年、醍醐天皇延喜二十一年、勅して弘法大師と謚せられたのは洵に所由ありと云ふべきであります。

法の組 ヴインバサーラ王

翌朝早く太子のお姿の見えないことが知れて、カピラエ城は大騒ぎとなりました。其處へ愁然として、シヤノクが歸つて来て、事の次第を物語りましたから、大王は早速大臣に命じて太子の後を追はしました。やがて大臣は太子に追ひつきました。

その時、太子は大きな樹の下に坐つて、冥想してゐられました。そこで大臣は太子の前へ進んで、カピラエ城の騒ぎのことや、淨飯王やヤシヨダラー姫のおなげきの有様を申上げて、是非ともお歸り下さるやうにと頼みました。けれども、一旦意を決した太子は更に聞入やうとはなさいません。しかたなく大臣は打しほれて歸つてゆきました。そうして、王様にこのことを御復命申上げました。

大王さまは、到底太子の志をまげることとは出来ないとお思ひになつて、今度はキヨウヂンニヨ・バツダイ・バサバ・マカナン・アセツジの五人を付添ひとして、太子の許へお送りになりました。太子は却つて之を迷惑に感じられました。今又これを

断つては、父王に不幸を重ねるばかりであるとお思ひになり、そのまま、五人のお伴をお許しになりました。

それから太子は、メーロ山に住んでゐる、アララカラン・ウツタラマの二人の聖者を尋ねる爲め、マカダ國の主都王舎城を通行しました。このことを聞いたビンバサーラ王は、英名のある太子の出家を惜しむの餘り、自らバンダ山に赴き太子と會見して「何故、あなたは出家なさつたのです。あなたの御出家は、カピラエ城の損失である許りでなく、天下の損失です。もしあなたが王位をお望みなるのでしたら、私の國を全部さしあげてもよろしい。それから私の兵を率いて、思ふままに、天下を統一してはどうですか、これこそ全印度に幸福を來たすことではありませんか。」と勧めましたが、太子は、

「王様の御厚意は誠に御禮の申様もございません。が然し、私は富や權利を求めてゐるのでは決してありません。まことの道を求めたくて出家したのでございます。』と仰せられました。ビンバサーラ王は、太子の氣高い氣品に感嘆して、遂には三界の

大導師だいどうしとなられるに相異さういないと考かんがへ、

「それでは、他日たじつそのまことの道みちとやらを得えられましたならば、何卒なにぞわたくし私わたしを一番ばんに教をへて下さい。」

とお約束やくそくしてお別わかれになりました。

僧の組 七夕の紙飾り(手工)

七夕たなばたに用もちふる紙飾かみかざりりの作り方かたを教をへます。前まへ以もつて兒童じどうに對たいして、色紙いろかみ、鉄てつを持も得とくする様ように傳つたへて置き、當日たうじつは黒板こくばんに其そのの切り方かた、折り方かた等を圖づを以もつて示しめし、充分ちゆうぶん會得えとくせしめて後のち教師けうし自ら鉄てつを持もつて、實地じつちに作つくつて見みせる。作つくらしめた數種たうしゆの紙飾かみかざりりは、之これに名札なふだを付つけて一先まづ佛前ぶつぜんに供たまへ置き、歸途きと之これを各兒童かくじどうに分配ぶんぱいして其そのの宅たくに持もち歸かへらしめる。

第二章 七月 第二日曜日

説話 七夕

七月七日に行ふ七夕といふのはお星さまのお祭で、支那に始まつたのだと申します日本では孝謙天皇の御代に、はじめて、このお祭をなさいました。

この七月七日の晩には、天の織姫さまといふ姫星さまが、天の河を渡つて、牽牛といふお星さまの處へ行かれるのです。そしてもしか雨が降ると、天の河はすぐ洪水になつて、渡れなくなりまますから、織姫さまは、その年は一と年泣いてお暮らしなさるさうです。

皆様は七夕の日には笹の端に五色の糸や短冊や色紙などを下げるのは、皆、書や書や手仕事てしごとが上手になるやうにお祈りするのださうです。

佛の組 過を改めよ

過とは反省または注意の足りなかつた爲めに起つて来る誤りであります。

過は悪とは又性質が違つてゐるから、古來深くは之を咎めません。けれども過だからとて、捨て、おおくことなく必ず一度した過は改めねばなりません。

四十二章經の中に

『人衆くの過あらんに、自ら悔いて頓にその心を息めずんば、罪來りて身に赴くと、水の海に歸して漸く深厚なるが如し。若し人過あらんに、自ら解して非を知り悪を改めて善を行はば、罪自ら消滅す、病の汗を得て漸く平癒することあるが如し。』とあります。

徳川中世の高僧、盤珪禪師或時龍門寺に於て結制を修行されました。其時會中に金銭を失つた者があり、種々詮議の結果一僧を捕へて、これを追放したいと禪師に訴へました。けれども禪師は御承知になりません。そこで大衆は憤りに堪へず、「この僧

を逐出さねば我々は一時に退散致します」と申しました。

禪師は一同に向つて仰せられました。

『退散しようと思ふ者は退散してもよろしい。この僧が金子を拾つて告げなかつたのは過である。必ずしも悪心から出たのだとは云へない。かうして結制を修するのは悪を伏し過を改めて、佛祖の正道を行せんがためであります。道義の心が薄いからとてこれを追放したり、過があつたとてこれを擯出したのでは、折角結制を修しても何にかならう。』この現實の事柄を前にして禪師の温い慈悲の溢れた言葉を聞いた一同は、深く反省をして、今更ながら禪師の徳に服しました。その僧もまた痛々しい迄に前非を悔いて精進をしたと申します。

人として誰か過をしない者がありません。私共は、日々反省してその非を知り時々之を改めませう。これが實に自分を完成し、佛心に一如しようとする最良の工夫であります。

法の組 六年の苦行

太子はビンバサーラ王に別れを告げて、メーロ山においでになりました。アララカラン仙人は、太子の氣高い風采と、まじめな、お心とをよろこんで、いろ／＼と自分の信じてゐる事を話しました。が未だ満足が得られません。そこで、アララカラン仙人に別れを告げて、さらに、ウツダラマ仙人の許をおたづねになりました。ウツダラマ仙人は、よろこんで熱心に、自分の考を、いろ／＼と話しました。けれどもアララカラン仙人の時と同じやうに、太子を満足させることはできませんでした。失望して、ウツダラマ仙人に別れを告げ、道すがら、太子はお考へになりました。天下に名高かい仙人ですらこんなことでは、いくら何處をたづね求めても結局は同じことであらう。『これは他人をあてにしてはいけない。どうしても、自分自身で道をひらかなければならない。』

こう決心なさいました太子は、方々たづねあるくことをおやめになり。尼連禪河の

東の岸にある前正覺山（ウルヴァイルヴァー）にお上りになり、きびしい苦行をおはじめになりました。

この苦行は、前にあつたバカ仙人のそれとは全く意味が異つて、苦行によつて心を引きしめて、正しいお悟りを開かうとお考へであります。太子は一日に一粒の米を食べて苦行をなさいました。椰子の花が咲いて、その花が散つて、實をむすんでもやはり太子は、一心に苦行をお続けになりました。

其の内椰子の樹は、六度花が咲いて、六度實をむすびました。このながい六年の間太子はこの苦行を続けられたのです。お身體は、だん／＼とやせ衰へて、宛然に、ミイラのやうな、痛ましいお姿となりました。

一體太子様は物好きでこんな苦行を遊ばしてゐられるのでせうか？

私共其他あらゆる生きとし生けるものを救ふ爲めの大きなお慈悲の心から、この死ぬるに勝る苦痛をあへて御辛抱下さつてゐるのです。

僧の組 日蓮上人

日蓮宗を開いた日蓮聖人は安房の小港で生まれました。お父様は以前は立派な士で貫名次郎重忠と呼んでゐましたが小港に来てからは漁師をしたり手習師匠をしてゐました。

かうした漁師の第三番目の子に生れた聖人は遂に立正大師とまで出世されました。聖人は大きくなるに従つて兄さん等よりも又他の子供よりも利口でまたきかない氣の子でありました。それに又他の子供と違ふことは、佛様を克く拜むことでありました。それで『この子は佛様に御縁が深いやうだから』と云ふので寺小姓にやられました。

お経もよく覚えるし智恵もすぐれてゐるので十八の時得度式をあげて名も蓮長と改めて一人前の僧になりました。そうして二十一まで一生懸命勉強しました。そうして考へるに『お釋迦様は法華經を御説きになる迄に色々なお経をおとさになつたが結局

は法華經をお説きになる、前じたくとして御説きになつたもので皆ほんとうの御釋迦様の御心に叶つたものでない。法華經こそは御佛様の御心が蓮華の花のように美しく開いたものであるから妙法蓮華經と名づけられたにちがひない。この法華經で世の人を教へないとは思議である、一つ諸國修業をして研究しよう』そこで御師匠さまにお願ひして修業に出ました。

鎌倉から比叡山、京都、大阪、奈良、それから高野山とずつと苦心して研究しました。その間實に十二年と云ふ長い月日の修業でした。

蓮長は此十二年間の修業で矢張り法華經が一番ありがたく御釋迦様は法華經を教へられる爲にいろ／＼他の御經を御説きになつたと云ふことをたしかめられました。こゝに一大決心をした蓮長は東の空の白む頃から海上はるかに旭日の上るのを見て手を合せ

『南無妙法蓮華經——南無妙法蓮華經——』と始めて御題目を唱へました。之からは名を『日蓮』と改めて一意法華經を廣められました。

第參章 七月 第三日曜日

説話 盲目さん

盲目さんたちは、今日何處かで人の噂に、お釋迦様を拜むと、どんな片輪でもすぐ治つてしまふと云ふ話を聞きましたので、なんでも、お釋迦様にお目にかゝつて、自分たちの目をよくして戴かうと思つて、大せいで一緒に、はる／＼お釋迦さまのお在でなる處をたづねて行きました。

けれども盲目のかなしさには、何處へ行つていゝかわかりませんので大きい聲で

『どうか、私達をお釋迦さまのお在でなる舍衛國へお連れなすつて下さい』と叫んでゐるのです。

すると一人の男が盲目さんの側へよつて、

『舍衛國へ行きたけりア、俺が連れてやらう。』と言ひました。盲目さん達は、地獄で佛の思ひ、

『では、どうかお願ひ申します。』

『そのかはり、只ぢやいけないよ。』

『はい、はい、それは承知致して居ます。』かう言つて盲目さんは、これまで、いろいろな人から慈んで頂いたお金をすつかり出して、その男の手へ渡しました。

『それでは、皆んな手を繋ぎなさい。』といつて、その男は一番先頭になつた盲目さんの手を、ぐん／＼引ッぱつて行きました。

そして、ものゝ五六町も行つたと思ふ時分、男は、ひよいと手を離して、『何處へなと行きな。』と言つて、何處かへ行つてしまひました。

盲目さん達は、びつくりして、『もし／＼、そんなひどいことをしないで、連れてつて下さい。』と言つて泣き出しましたけれども、もう男の聲は聞えませんでした。

盲目さん達は、手を繋いだまゝうろ／＼してゐました。すると、ふいに、

『何だつて俺の畑をふみにじつたんだ！』と怒鳴り付けるものがありました。

盲目さんたちは、飛び上る程びつくりして、『此處は畑でしたか、まことに申譯のないことを致しました。』と言つてはじめからの事を、すつかりこの人に咄して、お詫びしました。可哀想な盲目の話を聴くと、小作人は大そう氣の毒がつて、すぐ地主にこのことを申しました。

地主は召使の者を盲目さんたちに添けて、舍衛國へ案内させました。

やつこのことに舍衛國へ行つて見ると、お釋迦様はマカダ國へおいでになつた後でした。盲目さんは、何處まで自分達は不幸なんだらう、と言つて泣きました。けれども

泣いてゐたつて爲方がありませんから、また、ぞろぞろと手をつないで、マカダ國へ行きました。ところがどうでせう、マカダ國へ行つてみると、お釋迦様はちやんと舍衛國へおいでになつた後でした。しかたがないので、また舍衛國へ戻りますと、まアお釋迦様はまたマカダ國へおいでになつたといふことです。そんなことが七度も續きました。盲目さんたちは、すつかり疲れて、七度目に舍衛國へ行つた時には、もう、へとへとになつて、地べたへ、ぐんにやり坐つてしまひました。

ところが今度は、丁度お釋迦さまは舍衛國にいらつしやいましたので、盲目さん達のために、結構なおはなしを聞かせておやりになりました。

するとまア不思議にも、盲目さんたちの眼は、ばつちり開きました。

『やア、眼が開いた！』

と言つた盲目さんの聲は廣い舍衛國の隅々までも響き亘つて、國中の人々は、びつくりして家の外へとび出したといふことです。

大せいの盲目ではなく目開きさんは、すぐお釋迦様のお弟子になりました。

皆様！何事をしてこの盲目さん達の様に一生懸命に思ふことを成しとげ様と、七度も行つたりきたりしてこそ、見えない目もよく見える様になつたのです。さあ、この盲目さん達に負ずに一心に勉強致しませう。

佛の組 友を擇べ

釋尊は『鄙夫に近づくは臭物に近づくが如し、漸く迷ひて非に習ひ、覺えず惡を成すべし、賢人に近づくは香薰に近づくが如し、智に進み善に習ひ、自ら芳潔を成すべし。』と法句經の中にお訓になつてあります。實に親しむべきは善友で、遠ざかるべきは惡友であります。

御訓への通り愚かな人間は他を穢します。丁度臭い物と同じであります。智慧ある人はかやうな者には近づかないけれども、物の道理を辨へない人は、いつの間にかこのやうな愚かな者に感化されて了ふ。朱に交れば赤くなる、少し位ゐる立派な人でも終ひには悪い感化をうけて終ひます。

之に反して賢い人は香り高い薫香のやうなものであります。かゝる人に交れば自分も何時しかに、其人の感化をうけて賢い人となります。それでありますから、昔から立派な人格と智識とを完成した人は、多く良友を求めました。明末の偉人として今尚

崇拜されてゐる慈山徳清禪師は、よい道友を求めて共に精進して道を究めたいと久しい間願つてゐました。處が或日のこと考へました。『自分が東司に下るに、常にすがすがしき迄に淨潔である、これは必ず其處にほんとうの道人がゐて、淨く掃除するからであらう。自分はこの人を求めて、俱に道を修業しよう。』それから其人と相交んで友となり、俱に相勵まして修道しました。遂に二人は功なり、兩人とも王侯の歸依を受くるまでになりました。

人は皆美しい物を慕ひ、薰高い物を愛します。それなのに何故芳ばしきものとなることを希ひ求めない者が世間にはあるのでせう、人間の美しさは、容色の上にはありません、絶えざる修養に依つて生ずる徳の美しさにあるのです。

私共が臭物で終るも、香薰となるのも、みんなお互ひの心得一つにあるのであります。

法の組 乙女の供養

肉體があまりにつかれはて、精神まで弱り、今ではもう何事も考へることさへ出来ない程になりました。太子様はそこで、

『苦行ばかりして、肉體が弱つてしまつては、何も考へることが出来なくなる。身體が丈夫であつて、はじめて、しつかりとした精神を保つことが出来るのである。』

と、お氣づきになりました。それから苦行をお止めになつて、先づよごれた身體を洗ひ清めるために、尼蓮禪河へおはいりになりました。長い間のよごれを淨い流れで洗ひ落されました。暫くして太子さまは河から出やうと、なさいましたが、何分にも身體が弱りきつてゐるため岸へ上ることが出来ません。やつと手近かの蔓草にすがつて、這ひ上るや否や、太子さまは、そのまゝ青々と茂つた草むらへ倒れておしまひになりました。

ちようど、そこへ通りかゝつた、乙女がありました。ふと痛ましげな苦行者の倒れ

てゐるのを見て、氣の毒に思ひ、自分の持つてゐた絞りたての牛乳をさしあげました。思ひもうけぬ、この乙女の厚意を、太子さまは、どんなにかお喜びになつたこととせう？

このやさしい乙女の心からなる捧物の、新しい牛乳を召し上ると、今まで弱りきつてゐた太子さまの身體も、精神も、見る／＼よみがへつたやうに、元氣に充ち／＼て來ました。

太子さまのお伴をしてゐた五人の家來達は太子さまの熱心な苦行に感化されて、今では太子と同じやうに苦行をしてゐるのです。ところが、今日、太子様の水浴みをしたり、若い女から生々しい牛乳を貰つて、飲んだのを目のあたり見では、

『太子は苦行がづらさに、とう／＼止めたのだらう。太子が辛抱できなければ、かまはない、自分たちは自分たちでやらうじやないか。』

と、五人の者は遂に太子さまを見捨て、西の方、鹿野苑さして去つてしまひました。

元氣づいた太子さまは、そんなことには一向とんちやくなく、靜かに歩み移して大きな菩提樹の下に、もえたつやうな吉祥草を敷いて、お坐りになりました。菩提樹の枝は太子様の頭上にひろがつて、暑い日光をかげしてくれます。太子さまは、

『悟りを開くまでは、斷じてこの木の下を、動かない。』

と、大決心をしてお思惟にお入りになりました。

僧の組 成功を急いではだめ

御釋迦様の御弟子の中に二十億耳と云ふ方がありました。すいぶん御勉強になりましたが御悟りが開かれませんでした。

『こんなに勉強しても道が得られぬ、御悟りが開けぬ、どうしたら立派な佛になることが出来るのだらう、こんなことでは悟りはとても開かれぬ』と心を痛める様になりました。皆様も何か御稽古してゐてもなかく／＼に出来ないと嫌になるでせう。

御慈悲に満ちた御釋迦様は二十億耳のこの苦しみを御知りになつて二十億耳に優し

く申されました。

『二十億耳よ、お前はまた家に居た頃は琴を上手に弾いたと言ふね』と御問ひになりました。二十億耳は『はい弾きました』

『それでは尋ねるが琴を弾く時に急に弾けば好い音が出たか』いゝえ、急に弾きますると、好い音は出るものでは御座いません。』

『それでは緩かにすれば好い音が出るか』

『いゝえ、緩かに致しまして好い音は出ては参りません。』それでは如何したら好い音が出るものであらうか？』

『それは急にもせず、餘り緩かにもせず、恰度好い加減に弾きますると、始めて雅音が出て参ります。』と御答へ申上りました。

そこで御釋迦様は言葉をお改めになつて、

『二十億耳よ、されば道を修めるのも琵琶を弾くのと同じことである。急に道を得ようとして無理な勉強をすると耐へられなくなつて飽きが来る。それかと言つて緩かにす

ると懈怠の心が出て来る。いづれにしても目的を遂ぐることは出来ないのである。それであるから何事をするにも或時は過度に勉強したり或時は怠ると云ふことなしに、常に急がず、休まず絶えず勉強したなれば、いかなることでも出来ないものとは無い、心して勵めよ』と熱心に御誠にになりました。皆様私共も此の御言葉を守り急がず休まず強勉して立派な人になりませう。(増阿含經第九)

第四章 七月 第四日曜日

説話 太田道灌

太田道灌と聞けば、すぐ山吹の花のことを思ひ出させよう。狩の歸りに俄雨にあつて、簀を貸せと言つた時、みすばらしい少女が山吹の花を差し出したのです。道灌は歌を知らなかつた爲に大そう恥をかきました。

そのことがあつて後、太田道灌は一生けんめい歌の道を勉強しました。誰でも何か事があつた時、それを動機にして一生けんめいになれば、どんなむづかしい事でも、出来ないことはありません。

江戸城即ち只今の宮城はこの太田道灌が建てたのださうです。

佛法僧合級 林間の集ひ

昔釋尊當時の立派な人、偉れた仙人は皆あの印度の熱い太陽の光をさへぎつてゐる静かな深いあの林で修業をして遂に立派な人になることが出来たのです。

我が御釋迦様も林の中の菩提樹下に於て成道遊ばしたではありませんか、昔から世を救ひ人を助けた立派な人等はい多く林間から育立つてゐるのです。今日は昔の立派な人等に劣らぬ様この木陰で充分御勉強をいたさせよう。

(自習、復習の指導に半日を過す)

第五篇 八月の分

第壹章 八月 第一日曜日

説話 海水浴

いよ／＼たのしい暑中休暇になりました。
山に！海に！身體をきたえる時が来ました。うんとお遊びなさい。そして夏休みの間に、お父様やお母様がびつくりなさる程身體を丈夫にしてお置きなさい。
だけでも昔からよく言ふ通り『よく泳ぐものは、よく溺れる』のためしで、あんまり調子づくすと、きつと失敗します。しつかりした方について行つて貰ふならばよろしいが、ひとり河へ行つたり海へ行つたりなんかしてはいけません。

佛の組 清潔

清潔とは清淨純潔の意であります。佛家では多く清淨と云ふ語を用ひます。清淨は佛徳の一であり、經の中にも『如來清淨妙色身、普現十方無有比』と言つてあります。柳の緑、花の紅、山の青きみなこれ清淨でないものはありません。實に清淨

なる所は佛のまします所でありませう。私共はこれに依つて清浄なる所を尊びます。

其の昔、釋尊、逝多林に在した時、一日自ら箒を執つて林中を掃ひ給へば、舍利弗目連、大迦葉等の大弟子もまた箒を執つて園内を洒掃しました。時に釋尊は仰せられました。

「洒掃には二つの大きな利益がある。先づ掃ふ人の心を清くし、また見る人の心を清くするものである。」

誠に洒掃は住所を清潔にする丈けでなく、又克く人の心を清浄にするものであります。

太祖大師は、坐禪用心記の中に、「垢衣と舊衣とは洗洗補治し、垢膩を去つて清潔ならしめん、これを着用すべし。垢膩を去らざれば身冷へて病發る。また障道の因縁なり。」とお示し下さつてあります。これは衣服や臥具の清潔にせなければならぬと云ふことを、誠の給ふ御慈訓であります。

また高祖大師は、正法眼藏の中に、「佛法に必ず洗洗の法定まれり。或は身を洗ひ、心を洗ひ、足を洗ひ、面を洗ひ、目を洗ひ、口を洗ひ、手を洗ひ、頭を洗ふ、これら

はみな諸佛諸祖の正法なり。」と身心を洗ふて清潔にすべきことを御説き下さつてあります。

佛徳を仰ぎ、佛制に隨順する私共の何よりも先とすべきは清潔であります。殊に兩祖の御親言の示し給ふ所、誰か之を信受しないと云ふ者がありませう。

法の組 マーラの誘惑とお悟り

此の時魔（マーラ）界の王は、太子の正覺を得ることを好まず、其の成道を妨げんものと、太子の坐つてゐられる處へ、婆羅門の老僧に變じた一人の惡魔を送りました。惡魔は親切げに言ひました。

「若い修業者よ、御身の精進振りは敬服するの外はない。然しながら考へねばなるまい、御身の身體が何時までこの苦行に堪へ得るかを、御身は今瘦せ衰へてゐる、この儘この苦行を續けるならば、遠からず死にゆくであらう。世間を知らない若者の血氣から御身はこの様なことを思ひ立つたのでせう！御身は生存して始めて諸の善行も

出来ることを覺つてゐない、早く國に歸りなさい、御身の富と勢力ではいかなる善行でも出来るのです。そうして父を安心させて孝を完うし、人の模範となるべきです。」言葉巧みに悪魔は修業を中止する様に幾度もくも勧めましたが、大決心と大誓願をたて給ふ太子は少しも顧みず、専心思惟にふけつてゐられました。魔王はこの失敗にかんがみて、今度は三人の魔女を天女のやうに装はして、太子の許に遣はして、誘惑しやうと試みたのです。魔女は、あらゆる美しさの總てをつくして、或は歌ひ、或は舞ひ、或は甘言を以て、太子の心を修業から誘はうと努めました。けれども道心堅固な太子様に對しては、さすがの魔女も失敗に終りました。此處に於て魔王は大に立腹して遂に最後の手段たる暴力を以てしても、太子の修業の邪魔をせねばならないと部下の大勢の悪魔共を指揮して、菩提樹指して押寄せて來ました。そうして百雷は轟き、劫風は荒れ、其の凄じいこと、さながら此世は今にも破滅するかと思はれるばかりであります。しかも太子の泰然自若として三昧に入つてゐられるのを見て、愈々腹を立て手に手に持つてゐた一切の武器を、太子の頭めがけて、雨の様に投げかけました。

た。この時、太子の身邊から大光明がさしたかと思ふと、それらの武器は、不思議にも、みんな香りの高い美しい花となつて散りました。

この大光明に、悪魔等は大いに驚いて、疾風のやうに、命からくぐり地下の暗黒界へと逃げて終ひました。

悪魔が退散すると、天地は思ひ忘れたやうに静まり、そうして美しく晴れわたりました。

それは丁度二月八日の未明のことです。曉に近づくに従つて、冷たい朝風が、心地よく肌を沁みとほつてきます。思はず太子は眼をみひらきました。バラ色に色どられた東天に輝いてゐる曉の明星と、太子のお眼とがピッタリと合つた時、一道の靈氣が雷のやうに太子の心に感じ、其の刹那、太子はお悟りをお開きになりました。六年の苦しい修業の甲斐あつて、シツタ太子は遂に、何物にも勝る宇宙の眞理を見つけて出すことが出来たのです。世界の生きとし生けるものを總て救ひ給ふ釋迦牟尼佛とならせ給ふたのであります。

僧の組 よい友、わるい友

もし人もろくの悪しき友達に親しみ近づき、共に朋友となりて交れば、しばらくにして悪業そみ習ひ、その悪名は遠く聞ゆるに至らん。(佛本行經)

御釋迦様は或日のこと難陀尊者様と共に町に出てお歩きになつてゐました。

丁度魚屋の前まで御越しになられた時フト店前の腐つた魚が御目にとまりました。

そこで御釋迦様は難陀さまに申されました。

「難陀よ、あの腐つた魚の上に敷いてある青い草を手に取りて見よ」

難陀様は御釋迦様の仰せられるまゝ其の青草を手に取りました。しばらくすると御釋迦様は

「難陀よ、青草を棄てゝお前のその手を嗅いで見よ。何か臭味がありませんか」と御尋ねになりました。難陀様は青草を投げ棄てゝ手を嗅ぎました。それはく嫌な臭です。

「世尊、只鼻つくやうな不浄な臭が残つてゐる許りで御座います」とお答へ申上りました。

そこで御釋迦様は

「難陀よ、よく聞きなさい、人は誰でも色々な悪い友達をこしらえて一緒に交るなれば、丁度今お前が腐つた魚に敷いてあつた青草やそれを取つたお前の手の様にすぐに其の悪い臭が染み渡つて遂にはいつの程にかほんとうの悪人になつて終ふものである心せねばならない」と御訓になりました。